艦これ／龍の巫女と少年と……

エス氏

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

少女は海を守る存在―「艦娘」―になることを誓い、少年は共に戦い、総べる者―「提督」―を志すことを誓う……

２１世紀、世界中の海が戦渦に飲み込まれ、海を隔てた交流が衰え始めてから既に半世紀近く……

海の彼方から現れた未知なる敵『深海棲艦』を前に、人類の切り札となったのが、かつての大戦で活躍した艦船の意志をその身に宿した人間兵器――――『艦娘』であった。

これは、名高き軍神の名を受け継いだ者と、誇り高き艦の力を受け継いだ少女達の物

語

目次

第壱話 1
第弐話―前編 49
第弐話―後編 75
第参話―前編 104
第参話―後編 121

第壱話

あの子と最後に会ったのは、もう何時の事だったか……もう記憶の中にしか見いだせない、幼馴染の女の子……

―かん、むす……？―

―おとーさまが、ひなにそのししつがあるって言ってた……おねーちゃんも、せーちゃんのおじいちゃんも、言ってたもん―

もうすっかり薄れてしまった遠い記憶。その向こうで、幼い男の子と、もっと幼く見える女の子が話している……

―でも……せーちゃんとは、もう会えないって……ひなだけ、お引っ越しするんだって……いってた……―

よく見れば、女の子の肩が心なしか震えている。

男の子も、涙を堪えているような食い縛った顔で女の子を見つめていた。

―もう、会えない……？―

―うん……―

たった一言。それでも、女の子の言った言葉は鉛みたいにズン……と重苦しい感じがした。

―……かんむすになったらね、『てーとく』って人たちといっしょに海をまもるの……『しんかいせいかん』をいーーっぱい壊さないといけないの……だから、せーちゃんとはもう、会えないんだ……―

本当は、女の子も納得していないんだろう……だけど、小さい子供に何ができる？親の決め事にすら抵抗できないのに、一時の我儘をまかり通せるわけがない。

きっと、もう会えなくなる……

しかし……

本当に、それでいいの？

無理だと分かっていても、そう叫ばずにいられない。

初めてお互いを友達と認め合った掛け替えのない存在を、こんな簡単に失いたくはない――――――

―なら……ぼくが『てーとく』になるよ！―

気が付いた時、男の子はそう呟いていた。

―ぼくが『てーとく』になる……ひなちゃんが『かんむす』になるなら、ぼくが『てーとく』になって一緒に戦う……それならずっと一緒にいられるよ！約束しよう！―

男の子が徐に左手の小指を突きだす。その手はもう、震えていなかった。

―せー、ちゃん……？―

女の子は一瞬キョトンとしたが、やがて覚悟を決めたように口元を綻ばせた。そし

て、男の子の指に自分の小指を絡ませる。

―約束……うん、約束!!せーちゃんとひな、『かんむす』になってもずーーーーっと忘れないよ――――――!―

「ん……?」

身体を揺らす微かな振動が、青年を微睡みから呼び覚ます。

「……ここは……そうか、もうじき名古屋なんだね」

何気なく窓から外を覗き込むと、遠くの方に陸地らしき影がかすかに見える。現在、船は紀伊半島沖を通過中の様だ。

これまで6年間過ごしてきた江田島を出発し、呉の軍港でこの客船に乗ってから今日で2日目。予定通りいけば、昼ごろには名古屋の軍港に到着する筈だ。

空は程よい晴れ模様。カンカン照りでも曇りでもない、穏やかな日の光が、山口　誠太郎の意識を鮮明に覚醒させていく。

それは、彼にとっては何処か新鮮な感覚さえさせるものであった。

誠太郎はこれから、住み慣れた呉を離れ、瀬戸内海を超えて名古屋まで行かなければならない。足繁く通った広島市の平和公園にも別れを告げ、近所や同級生達にも別れの挨拶は済ませた。既にあちらに引っ越し用の荷物は送っておいたが、後は自分が行くだけ。

そこで新生活を始めるのだ。

着いてからは忙しくなりそうな予感がしたが、元々夜遅くまで夜更かしして眠れなかったこともあり、何もしないこの状況は非常に心地良く思えるものだった。

慣れてきた心地良さは、安らぎと共に眠気すら運んでくる。
何時の間にか、誠太郎の瞼も少しずつ下がって来ていた。
（まだ、時間はあるか……向こうに着くまで、もう一眠りしようかな）
そう思いながら、彼の意識は少しずつ微睡にとろけていった。

ジリリリリリリ!!!!!
船内に突然、甲高い音が鳴り響くまで。

＊

『それ』は、今この瞬間まで水底に鎮座していた。
太陽の光が差し込む海中。その下にある薄暗い岩礁地帯にいた何かは、ふと何かに気付いた。魚やクジラとは明らかに異なる、機械のように規則正しく水を掻きわける音……

それが大型船のスクリュー音だと確信した瞬間、潜んでいた何かは行動開始していた。

狙うはあの船……あれを海の藻屑と化し、その命を残さず喰らってやる――――――!!

＊

「何だ!?」

警報が鳴った瞬間、今まで纏わりついていた微睡は霧散し、張り詰めた空気が船内に充満する。

この空気が何なのか、誠太郎は知っていた。

（この緊迫感……船が狙われているのか!?）

あの時――――――自分の乗った船を海の藻屑に変え、両親やたくさんの乗客を海に引きずり込んだ忌まわしき存在――――――その時、初めて目の当たりにした敵――――――『深海棲艦』の姿。

あの冷たい目をした海生生物の様な異形の姿は、忘れられるものではない。

その怪物によって海に消えていった両親の断末魔も――――――

「くっ！」

軽やかなフットワークで部屋を飛び出した誠太郎は、駆け足で部屋を飛び出す。そしてブリッジへと足を進めていった。

＊

同時刻、渥美半島南西７０キロ海域

「ったく、哨戒任務がやっと終わりそうだってのに深海棲艦が出るなんて……！」

「帰り際のれでぃーにいきなりスクランブルかけるなんて、あのクソ提督もムチャクチャするわ！」

「まぁまぁ……緊急事態なんだ、近くを通ってる僕達に頼むのは自然な流れたと思うよ――――あの提督にしてはね」

海上を進む一群の影。

それは重厚な装備を身に纏い、海を守る為に戦い続ける乙女達――――――艦娘である。

彼女達は今、哨戒任務の最中に受けた緊急出撃命令を受けて急行している最中だった。
先頭を進むのは、緑の着物を纏い背中に矢筒を背負ったツインテールの少女。そして、右肩と右手に砲塔を付けたセーラー服の小柄な少女。
その背後からは背中に大きな砲塔を背負った少女２人が追従し、互いに目で合図しながら進行する。
そして最後尾を進むのは、緋色の着物と栗色のボブカットが似合う長身の少女であった。
「『飛龍』！準備は良い？」
先頭を行く緑の着物の少女が、最後尾の少女に振り向いて言い放つ。
「あ、ハイ！自分はオッケーだよ」
飛龍と呼ばれた少女は、先頭の空母艦『蒼龍』からの問いに一拍遅れて答えた。
「『暁』ちゃんは客船の先導、最寄りの港へのアプローチよろしく。『山城』さんと『時雨』ちゃんは砲撃支援で暁ちゃんをサポートして」
「わかった！」
「上等よ」
『山城』『時雨』と呼ばれた２人は、飛龍の問いかけに頷いて答える。

「そんでもって……敵は私と飛龍の航空機隊で仕留める！」

手早く作戦を確認した一同は、即座に行動に入っていた。

＊

『皆様、ご安心ください！この船は絶対安全です。係員の指示に従って、各自冷静に行動して下さい』

船内に流れるアナウンス。しかし、突然の出来事に誰もついていけない。

不安と恐怖の入り混じった空気が船内に充満していた。

（この空気は……まずい、このままだとパニックになる！）

張り詰めた緊張の中で混乱が起きることは、最も避けたい事態。誠太郎も、その状況が作り出す恐怖をよく理解していた。

逃げ場のない海上でそんな事になれば、船内は暴動状態になる。海に飛び込んで溺れる者だって出てくる。そうなった時の被害は計り知れない。

だが……こんな時にこそ、経験からくる判断は重要なファクターとなる。

現役の海軍高官である祖父から良く聞かされていた事だが、目の当たりにするとその

恐ろしさは嫌でも伝わってくる。

しかし、焦って行動してはいけない。

冷静に状況を分析し、その中から最良の方法を見つけ出す……それが最善の方法だ。

杞憂で済めばそれが一番だが、もし本当に深海棲艦が狙ってるのだとしたら……下手に動いては危険だ。

「あ、あれは!!」

途端に、外を見張っていた船員が声を上げて後ずさる。深海棲艦が視界に現れたのだ。

歪な魚や鯨の様な、もしくは深海魚を思わせる様な独特のフォルム……明らかに魚類の類ではない。

現れたのは、『駆逐イ級』と呼ばれるものだった。下級の深海棲艦ではあるが、艦娘でもない通常の船舶にとっては恐ろしい脅威となる。ましてや非武装で足も遅い客船など、連中にとっては格好の餌食（カモ）だ。

それが3隻、まっすぐに船へと向かってきていた。

しかし、それと同時に――――――

ドガガガガガッ!!

何かが破裂するような音が響き、大型船に迫っていたサメの様な頭が次々に弾けて吹っ飛んでいく。同時に、海上を無数のトンボの様な影が横切っていった。

「あれは……!?」

誠太郎の視界に映ったそれは、旧日本軍の零戦をミニチュア化したような戦闘機の形状をしていた。これが今、眼前の深海棲艦を叩いたのか……!

そして、こんな代物を運用できるとしたら――――――近くに艦娘がいる。それも恐らく空母級が2人はいるだろう。

彼の推測は当たっていた。

一瞬遅れて、海の彼方から人の様な影が幾つも現れたからだ。

＊

「こちら名古屋軍港基地所属、暁型駆逐艦、『暁』よ！そこの客船さん、応答して!!!」
　先頭を進む暁が、無線で客船に呼び掛ける。
『こちら客船『横浜丸』、援護に感謝する！』
　客船からは、狼狽しつつも力強い応答が聞こえた。とりあえず、間に合った様だ。
「良かったぁ……そ、それじゃあ最寄りの港へエスコートするわ。私について来て」
　一先ず胸を撫で下ろした暁は、すかさず客船に向けて指示を出した。そして先導する様に前に出る。
「こちら暁。山城さん、時雨さん、アプローチ成功よ♪」
　とりあえずコンタクトは上手くいったらしい。襲ってきた深海棲艦も、飛龍と蒼龍の航空機体で撃破された様だし、後はこのまま船を港に着ければ仕事はおしまいだ。

「ふぅ、とりあえず終わったね」
「一時は間に合わないかと思ったけど、良かった良かった」
　客船の後方についた飛龍と蒼龍は、一仕事終えて帰ってきた艦載機を出迎えていた。

今回の敵はイ級3体と少々物足りない気もしていたが、客船に被害が無くて何よりである。とりあえずは鎮守府で待つ提督にもいい報告が出来そうだ。

「それじゃ帰ろっか、蒼りゅ――――――ッ!!!!!」

何気なく蒼龍の方に振り返る飛龍。そのまま軽い台詞で締めくくろうとした……瞬間、その表情が凍り付いていた。

ガガガガガガガ!!!!

青い着物に緋色の影が覆い被さった途端、上空から不吉な破裂音が鳴り響いていた。

＊

「あれは!?」

「蒼龍達の方向から!?」

暁と共に客船を先導していた山城、時雨は、背後からの不吉な音に素早く反応する。

すると、彼方から飛来するゴマ粒の様なものが視界に入ってきた。

「深海棲艦の戦闘機!?」

ほんの6機ではあったが、あの歪なフォルムは間違いない。空母級から発進した深海

の艦載機だ。
しかも、2機は腹に何やら黒光りする物体を吊るしている。爆弾だ！
「くそっ、飛龍・蒼龍ーーーーーーーーー！」
時雨が粟を食って跳び出し、山城が援護射撃とばかりに砲撃を空に放つ。
「時雨は2人のところへ！ここは私が引き受けるから、暁ちゃんも客船を連れて早く離脱しなさい!!」
背後から山城の声が聞こえた時には、時雨は全速力で飛龍達のところに向かっていた。

一方、展開していた敵は砲撃につられたのか、何機かが山城に向かって迫って来ていた。
（これでいい……出来るだけ多く引き付ければ、後は皆が何とかしてくれる――――――せめて仲間とあの船の人達は守らないと!!）
どのみち、艦娘として海に出た以上、海で死すならば本望……そうでなくても、姉共々『不幸姉妹』だの『欠陥戦艦』と揶揄されていた自分がここまでやってのけたのだ。
それだけでも十分……後はきっと、皆が自分の遺志を引き継いでくれる――――――

沈黙を破るかのように通信機が鳴ったのは、ちょうどその時だった。

＊

「う、ぐぅ……い、痛い……痛いよぅ」

飛龍の右足は、焼け火箸を喰らった様に焼け爛れている。傍から見ても重傷と思われた。おまけに甲板も穴だらけ、これでは艦載機の発進は難しいだろう。

「飛龍！飛龍ッ!!」

一方、助けられた蒼龍は悲痛な声で彼女に呼び掛ける。

「あ、ぁはは……ごめんねぇ、ちょいと無茶してコケちゃった。てへッ」

本当は痛くて悲鳴すら上げられない筈なのに、それでも心配をかけまいとわざと笑顔を作って笑いかける。

「こんな無茶をして……沈んじゃオシマイなのにぃ――――――」

苦痛に苛まれながらも無理に笑顔を作って笑みを浮かべる飛龍。蒼龍は傷付いた友を気遣うしか出来なかった。

そんな彼女達を嘲笑う様に、敵の航空機が２人の真上に接近する。そのまま爆弾を落

として一網打尽にするつもりだ。

『2人とも、伏せるんだッ!!!』

繋ぎっぱなしにしていた通信機から鋭い声が聞こえたのは、ちょうどその時だった。

その瞬間、

グワッ!!!

爆弾を落とそうとした敵機が、突然飛来した砲撃に貫かれて四散していた。

「飛龍～～～蒼龍～～～～～!!!」

その声と共に現れたのは、時雨だった。背中の2門の砲塔が硝煙を上げている。

「「時雨（ちゃん）!?」」

＊

同時刻、

「間一髪……だったわね。山城さん」

「ええ、グッドタイミングよ。流石、レディは伊達じゃないわね」

幾つもの砲塔で対空砲火を行う山城。その横で援護射撃を行うのは、暁。山城だけを狙っていた敵機の側面を突き、クリーンヒットをかましてやったばかりだ。

「トーゼンよッ――――――だけど……あの指示がなかったら、ホントにどうなってたかわかんないわ」

数分前、船を先導して離脱しようとしていた暁は不意に別の通信を受け取った。発信元は客船の救難チャンネル、どうやら船員の誰かが呼び掛けているらしい。

そして応じたところ、思いがけない言葉が暁の耳朶を撃っていた。

『こっちの先導は後回しで良い。それより直ちに後方の戦艦のもとへ向かってくれ』

聞いた時には何を言ってるのかと疑ったが、あそこで駆けつけなければ山城は集中砲火に晒されてただでは済まなかっただろう。誰だか知らないが、先見の明に長けた人物らしい。

「暁ちゃん、残りの敵を掃討したらすぐさま蒼龍達のところに向かうわ。ついてきてちょうだいね」

「了解よッ!!」

＊

その頃……

「し、時雨ちゃん、どうして此処に？」

突然現れた時雨に、飛龍は素っ頓狂な顔で問い掛ける。

「いや、僕もわかんないんだけどね……急に客船から貴女達のところに向かって欲しいって言われたんだ。ちょうどそっちに行くところだったんだけどね」

そう言いながらも砲撃の手は緩めない。上空にいる敵の航空機は次々に時雨の餌食となっていく。

「何処の誰だか知らないけど……ま、一応感謝しときますか」

程無くして、最後の1機が反転して戦場から離脱していく。

それに合わせて、海の彼方から今度は別の何かがちらっと見え始めた。

「あれは……軽母ヌ級!?」

飛龍と蒼龍には、それが何なのかすぐに分かった。先程襲ってきた敵機の母艦に間違

いない。

顎のある歪なクラゲを思わせる異形の形状は、確か「ヌ級」。深海棲艦の軽空母だった筈。

それが2体、こちらに向かって口を開けていた。

同時に、その中から複数の影が勢いよく飛び出してくる。新しい敵機のようだ。

『聞こえるか、そこの艦娘達……今出せる航空機は幾つ残っている？』

それと同時に、開きっぱなしの回線から飛龍、蒼龍、時雨の耳に新たな声が入ってきた。先程の回線と同じ声だった。

「あ……あんた、一体何者……？」

思わずそう返してしまう蒼龍。しかし、そうこうしているうちに敵機の第2陣が次第に近づいてくる。

「ッ！」

射程距離外ではあったが、すかさず時雨が構えた。が、そこに再び回線が開く。

『時間がない、分かる範囲で良いから教えてくれないか……今動かせる飛行機は幾つ

残ってる？』

何だコイツ、この非常時に何を言ってるの……？

蒼龍にとって、此度の通信の時は、正直うざったいという気持ちしかなかった。

「……２１型零戦が４機、９９式艦爆が３機、９７式艦攻はもう２機しかないわ。飛龍の甲板だってもう使えない……何処の誰か知らないけど、こんなのでどうするって言うの!?」

イライラした口調で、蒼龍が回線に応じた。こんな寡兵を投入したところで、十数機はある敵機とどう戦えばいいのか……闇雲に出撃させても、こちらの機体を使い潰すだけだ。

しかし、次に放たれた指示を聞いて、３人は思わず目を見開いていた。

「え……!?」

＊

「バカ言わないでよッ！そんな無謀な作戦、出来るわけないでしょうが!!」
驚いたのは蒼龍だけではない。飛龍達に合流しようとした山城、暁も同じく回線を聞いていた。
その仔細を聞き、山城が声を荒げる。
「あんた、誰だか知らないけどいい加減に――――――」
『無茶は承知の上だ！けど、何もしないと君達は死ぬ！君達の仲間も、船の人達も、死ぬ危険がグンと上がる！それでもいいのか!?』
心なしか、その声は切羽詰まっている様に聞こえた。だが、その声色には強い気迫が込められており、飛龍も山城も否応なくそれを感じざるを得なかった。
『……申し訳ない、君達にこんな危険な真似を強要してしまって――――――だけど、全員生きて帰れる可能性が少しでもあるなら、僕はそれに賭けてみたい。だから一度でいい、君達の力を貸して貰いたい――――――!!』
「飛龍、蒼龍、山城……みんなはどうするの？」

突然の申し出に文句を言いあぐねていた蒼龍と山城。
そこに波紋を投げかけたのは、思いがけない人物だった。
「時雨……」
時雨もオープンになった回線を通じて、その海域にいる艦娘全員に声が聞こえるように話しかけていた。
「まぁ……聞いた限りじゃ、僕も正直危険だと思う。荒唐無稽もいいところだよ……霧島さんだったら、絶対こんな危険な手は使わないね」
イライラし始めた蒼龍や山城に比べて、彼女は冷静に言葉を紡ぐ。
「でも、ここでこうして待ってたって危険なのは同じだと思うよ……ていうか、このまま手をこまねいたせいで船が危険にさらされたら、それこそ本末転倒じゃないかな――――それならいっそ、一矢報いてから倒れても悪くない気がする。最悪、船を逃がす暇くらいは稼げるよ」
「暁もやるわよ！」
今度は、山城に随伴して直進する暁が彼女に呼応する様に答える。
「こいつらを突破しなきゃいけないっていうんなら、れでぃーの誇りに賭けて絶対に負けられないわねッ!!」
「暁ちゃん……って、マジ？こんな成功する保証もないのをわざわざ――――――」

「危険よ、こんなことをしたって返り討ちに遭うだけじゃないの～～～～、暁ちゃんも時雨ももうちょっと冷静に考えて――――――」

やる気を見せている時雨と暁。これに対して蒼龍と山城はどうもいまひとつ納得できていないらしい。

そうこうしているうちに、山城と暁も何時の間にか飛龍達のもとまで接近してきた。

「来たね、2人とも……まぁ乗りかかった船だし、ここまで来たら僕もひと暴れさせて貰うよ」

「時雨……あんたも何ムキになってんのよ、こんなのやったって――――――」

「そうだよ、飛龍だって負傷してるのに、こんなのムチャクチャじゃない――――――」

しかし、なおも抗議しようとする2人の口は振り向いた瞬間に閉ざされていた。

「山城さん、蒼龍……わ、たしも……」

彼女達の視界に入ったのは、焼け爛れた足を震わせながら必死で立ち上がろうとする緋色の着物の艦娘の姿……

「わ、たしも……私も、賭けてみるよ。貴方の作戦――――――ううん、やらせて下さい！」

その躯体は硝煙と傷口から滲み出る鮮血で痛々しく見えた。

しかし……全員を見据える彼女の双眸は、並ならぬ決意を称える様に煌めいている――――そう感じさせる強さすら覚えるものであった。

＊

軽母ヌ級は、眼前数キロ先に見える客船めがけてゆっくりと前進する。

少数の艦娘が必死の抵抗を見せている様だが、それさえ排除すれば後はこちらのものだ。やはり十数機の航空機による対艦攻撃は効果的に敵の戦闘力を奪っている。

だが、相手は艦娘。そう簡単に轟沈してくれるとは限らない。先程より若干数を減らした航空機の数が、それを如実に物語っている。

上等だ。

ならば、今度は二度と浮かんで来れない様に爆撃で粉微塵にしてくれる。

そう呟くようにヌ級の頭部から、大型の黒い筒をぶら下げた航空機が数機、爆音を立てて発進しようとしていた。

だが……ヌ級の余裕は不意に消し飛ばされた。
突然の爆発音と衝撃波が海域に鳴り響いたのだ。

＊

「もう……こんな無茶、マジでやる気!?」
雁行陣状に展開した零戦４機の編隊の真下に立ちながら、蒼龍は悪態を尽く。
「無茶も何も、ここまで来たら乗りかかった船だよ！飛龍も山城も見す見すやらせるわけにはいかないしねッ!!」
「それに、あのクソ提督に指示されるよりはマシだわ！この際乗ってやろうじゃない♪」
彼女の前を走るのは、時雨と暁。こちらは蒼龍と対照的に、既に覚悟を決めたように真正面を見据えていた。
暁に至っては、寧ろ何処か楽しげでもある。

「とにかく全速前進!さっきの手筈通りに展開するよ!!」（時雨）
「オッケー♪れでぃーの底力、見せてあげるわ!」（暁）
「ったく、誰だか知らないけど後で覚えときなさいよッ」（蒼龍）

『手持ちの零戦４機を突撃編隊にして、空母と駆逐艦２人による３人１組で突撃する。但し攻撃は零戦による露払いに限定し、艦娘はこの段階では手出しをしない……そのまま敵の攻撃を避けつつ、全速力で敵陣を突き抜けて貰う』

客船の謎の人物から言い渡されたのは、この一件意味不明な指示だった。
幸い、零戦は弾薬も増槽にも余裕があり、ある程度の作戦行動は可能な状態だ。
だが、眼前の敵に一発も攻撃せず、尚且つ一発も被弾せず回避しながら通過する……というのは、思っていた以上に骨が折れるものだった。

一方、零戦４機は雁行陣を維持しながら敵機の群れ、特に重装の攻撃機を狙って落としていく。相手側は突然現れた敵に即座に対応できず、ルート上にいる敵は次々に墜落していった。

そうこうしているうちに、ヌ級まで残り５００メートルの位置まで３人は歩を進めつつあった。

「うわ、ホントにここまで来ちゃった……って、次！次の作戦よ！」

＊

軽母ヌ級は予想外の反撃に内心で驚いていた。

当初は艦娘達もお目当ての客船も、双方確実に鎮めるため、持ち駒の航空機の多くを爆撃装備に換装して出撃させた。なのに、まさか相手が戦闘機と対空砲火を引っ提げて突撃してくるなど想定していなかった。

絨毯爆撃のつもりで密集させたのが裏目に出た。自分の持ち駒達は、零戦や駆逐艦娘の反撃に虚を突かれて次々にすり減らされていく。

それでも、数の有利は変わらない。態勢を立て直しさえすれば、逆にこっちからすり潰してやる。

この程度に戦鬼や姫の手を煩わせることもない。

だから、艦娘達の意図など知らない。読み取るまでも無いと思っていた。

しかし……それはヌ級にとって、致命的なミスだった。

＊

「行くわよ時雨、暁ちゃんも準備いい？」
「いつでもいい、行けるよ」
「それならチャッチャと始めましょうよ」
最後尾を行く蒼龍が指を鳴らしたその瞬間――――――暁と時雨が、不意に左右へと逸れたのであった。そして、蒼龍だけは猛然とヌ級に突進していく。
「っけぇーーーーーッ!!!!」
ヌ級の周囲に残る爆撃機が慌てて爆弾を投下しようとするが、全力疾走する蒼龍には当たらない。寧ろ、後ろに落ちた爆弾の爆風が追い風となり、蒼龍をますます加速させていく。

そして――――

一瞬の交錯の後、蒼龍はヌ級の側面を悠々とすり抜けていった。同時に、零戦４機がその上を飛び越えて彼女のところへ戻っていく。

一方、敵艦の真後ろを取った蒼龍は、直ちに次の行動に入っていた。間髪入れずに矢をつがえ、キリキリと引き絞る。

その頃、側面に逸れた暁と時雨も既に所定の位置についていた。ヌ級を中心に、直角二等辺三角形の三点を形成する形で敵部隊を取り囲んだ奇妙な陣形だった。

＊

最初、ヌ級には艦娘達の意図は理解できなかった。

この奇妙な布陣……確かに背後や左右に逸れる動きはある程度抑えられるだろう。だが、自分達の前方はがら空きのままだ。

一角を崩すまでも無い。正面から抜け出してしまえば逆にこちらが主導権を握れるではないか。

そう考えたのか、すぐさまヌ級は前進しようとする。

だが……途端に、前進しようとした航空機の半数がいきなり爆炎に飲み込まれていた!!!!

同時に、ヌ級のギョロッとした両眼が前方にいる何かを捉える。

いつの間に前進していたのだろうか……そこには、前方に幾つもの砲塔を向ける人影が、そして、彼女に肩を支えられている緋色の着物の少女が悠然と佇んでいたのだった。

＊

「全員、配置についたみたいね。これでいいのかしら？」

緋色の少女を支えつつ、砲門を前方に向けている戦艦娘―山城―は、繋ぎっぱなしに

していた回線越しに問い掛ける。

一方、支えられていた少女―飛龍―も、ゆっくりと自分の足で海面を踏みしめて弓をつがえた。矢を握った左手がキリキリと弦をしならせていく。

『ああ、バッチリだ……総員、全砲門開けッ!!!!!』

艦娘達が取った作戦、それはマニュアルには載っていない、ある種の無謀な賭けでもあった。

機動力の残っている蒼龍と暁、時雨を航空機の密集する敵陣に突撃させ、直前で敵全体を取り囲むような形に配置する。そして残った前方に、山城と飛龍を向かわせて包囲、殲滅する。先程の回線越しの人物が即興で立てたのが、このような作戦だった。

蒼龍には残存の零戦と９７式艦攻を託して敵空母の背後に回って貰い、敵艦が後退し

ないように道を塞いでもらう。そして配置と同時に、飛龍と山城で前方を塞げば、敵は行き場を失って立ち往生せざるをえない。

その一瞬のチャンスに賭け、最大の攻撃で敵に確実なダメージを与える。

急場凌ぎの無茶な作戦。真っ当な戦術指揮官なら恐らくこんな危険は冒さないだろう。

だが、不意を突かれたヌ級と敵航空機群は艦娘達の動きを把握できず、気付いた時には絶好のタイミングで包囲網が完成してしまったのであった。

そこから先は、艦娘達の独壇場だった。

山城と時雨、暁の対空砲が爆弾を搭載した敵機を次々に吹っ飛ばし、蒼龍の放った97式艦攻がヌ級に小さくとも確実なダメージを与えていく。やがて、敵はヌ級2隻を残して全て落とされてしまっていた。

「今よ、飛龍！」

「ブッ飛ばしちゃえ！」

そして最後の一手を放つのは――――

「行きます……９９艦爆、全機発進ッ!!!!!」

山城が合図を送った瞬間、飛龍の指が矢を解き放つ。たった1本のそれは、瞬時に3機の９９式艦爆に変貌。傷付いた2隻の敵に猛然と突き進むと、大型の黒い物体を同時に投下した。

その黒い物体は重力に吸い寄せられるように敵の頭に向かって落ちていく。そして

グワッ!!!!

次の瞬間には、大きな爆炎となって敵を飲み込んで膨張。轟音と大きな水柱を噴き上げて四散していった。

「敵の艦影……なし!やったよ、みんな!」

水柱が消えた直後、油断なく水面を見張っていた時雨が安堵した様に声を上げた。

「大成功!大成功だわ!」

暁もこの報を聞き、小躍りする様にくるくる水面を回り出す。
「す、凄い……ホントに、勝っちゃった」
蒼龍は目の前の出来事が信じられないといった驚きの表情で先程まで敵がいた海域を……そして、件の人物が乗っているであろう客船を見つめていた。

『ありがとう、大成功みたいだね』
そんな彼女の意識を引き戻す様に、回線からその人物の声が聞こえた。
「え、えぇ！ご覧の通り、完全にブッ飛ばしてあげたわ」
ちょっと声が上擦ってしまったが、蒼龍は件の人物に強気に応対する。
『そうか……君達の活躍に感謝する、ありがとう』
回線越しに帰ってきたのは、素直な感謝の言葉。未だに顔も名前も知らない奴のものだが、こうして言われる分には悪い気はしない。
「とっ、当然よ。あんまり艦娘を甘く見ないで欲しいわ――――――って、そんな事より私達の仲間……正規空母の飛龍って言うんだけど……あの子、さっきの爆撃で足怪我しちゃってるのよ。感謝するっていうんなら、あの子をそっちに乗せてあげたら？」
『勿論そのつもりだ。彼女をこちらに連れて来れるかい？』
そして、蒼龍が提示した条件にも向こうはアッサリと応じてくれた。

『今からそちらに迎えが来る。船と一緒に君達も海域から離脱した方がいい』

数分後、一隻の脱出用モーターボートが飛龍達の方向に近づいてくるのが見えた。

＊

「あ、あはは……ゴメンね蒼龍。なんか1人だけズルしちゃって」

ボートに乗せられた飛龍は、そのまま客船に収容されて一緒に港へ行くことになった。といっても、いくら怪我しているとはいえ1人だけ特別扱いされている様な感じは否めない。

「なーに言ってんのよ、怪我人なんだから無茶しないの」

「そうだよ、提督には僕達が言っておくから、飛龍は港に着くまで休憩してていいよ」

が、勿論それでも自分が中破、航行困難である事に変わりはない。

ここは山城と時雨の言う通り、短時間でもインターバルを取っておくのがベストなのだろう……

「それに、さっきの指示出してた人、どんな顔なのかも気にならない？あの船に乗ってる

んでしょ？」
そこに、暁もこっそり耳打ちしてくる。
「う、うん……それもそうだね」
先程の声……初めて聞く筈の声なのに、何故だろう……こんなにも頼もしいって思えるのは……
少なくとも、自分達の提督や時々査察にやってくる憲兵さん達とは全然違う、信頼したくなるような、そんな響きすら感じられる……
それだけ興味を持てる人、どういう人物像なのか、確かに関心は湧いてくるものだ。
やがて、艦娘達の前にボートが到着する。そこに待機していた数名の船員に促され、飛龍は船へと入っていった。

＊

１２年前、とある神社の境内で――――

―私の孫の『誠太郎』だ。さ、ご挨拶しなさい―

初めて出会った時の彼は、どこか儚くて壊れてしまいそうな感じの男の子だった……

―は、はじめ、まして……や、ま…ぐち、せぃたろぅ……で、す……っ―

うちの近くに引っ越してきた将校さんのおじいちゃん。その人が連れてきた、私よりちょっと年上のお孫さん……

お父さんとお母さんを海の事故で亡くして、おじいちゃんと2人きりで引っ越してきたって、お姉ちゃんから聞いた事は覚えてる……

最初は頑なで1人きりのときが多かったけど、私とお姉ちゃんはよく彼と一緒にいる事が多くなった。といっても、引っ込み思案でいつも泣いたり怯えたりしていて、最初はどう接していいのか解らなかったっけ。

何もわからないままぶつかって、一緒に泣いて、怖がって……そのうち一緒に笑ったり怒ったりできる様にまでなっていって……

とにかくそんなかんじで、次第に男の子も私達に対しては心を開くようになっていった……

そんな時間が2年くらい続いた、秋のある日……

―かん、むす……???―

―そうだ。君にはその適性が見受けられる……もしよければ、我が海軍の為に君の力を貸して貰えんだろうか？―

突然、うちの神社にやってきたおじいちゃんは、私の目を見て言った。

私には『艦娘』としての適性がある。

それを長い時間をかけて起こしていき、やがて艦娘として覚醒し、ゆくゆくは共に海軍として戦ってほしい。

でも、そのためには……私はこの家を出て、同じ子達と一緒の施設に移らなきゃいけない。

家族とだって、ずっと会えないかもしれない……

もし艦娘となる意思があるのなら、今から親元を離れて訓練機関に入らなきゃいけないんだって……

お父様とお母様は名誉な事だって喜んでたけど、お姉ちゃんとおじいちゃんは何だか辛そうに俯いてて……その時は、凄いと思える気持ちと寂しい気持ちが混ぜこぜになっ

て、どんな顔していいのか解らなかった。
お父様とお母様が喜んでくれるなら、やってみたい……でも、あの子ともう二度と会えなくなるかもしれない……
―誠太郎、鳥居のところにいるって……あいつに、あんたからお別れ言ってやんな―
今にも涙がこぼれそうな顔で見つめるお姉ちゃんに背中をポンッと叩かれ、私は夢中で彼のところに走っていった。

そのときは、まだ知らなかった。
彼と私が、ある1つの約束を交わす事になるなんて、この時は全然思ってなかった……

――――ひなちゃんが『かんむす』になるなら、ぼくが『てーとく』になって一緒に戦う――――!!

＊

現在

ボートから客船へと引き寄せてくれたのは、飛龍より少し年上っぽく見える長身の青年だった。

短く切り揃えた黒髪と灰色がかった大人しそうな瞳が似合う彼は、飛龍を見つめると真っ直ぐに彼女の目を見つめて――――そして、次の瞬間には少し驚いたように表情を揺らげてしまっていた。

「君は……」

だが、驚いたのは彼だけではない。

「あ……貴方は――――!?」

彼と対面した飛龍もまた、負けず劣らずの驚愕を顔に浮かび上がらせて立ち止まっていたのだ……！

その面差しは、飛龍の記憶の中に存在する彼とよく似ている……ように見えた。

少女の姿は、青年の記憶に残る幼馴染の姿によく似ていた……

「君は――――ひな、ちゃん???」

「ウソ――――――――せいちゃん……貴方、せいちゃんだよね!?」

だが、一目見た瞬間に確信した。

目の前にいる人物は――――――――つい先ほど、一緒に戦っていた者は――――――――

遠い思い出の中にいた、掛け替えのない存在だという事に――――――

＊

横須賀　海軍総司令部　通称「赤レンガ」

「紀伊半島沖に、深海の勢力が……？」

昼の陽気が照り付ける廊下で、老人はその報告を受けていた。

「はい、参謀長。軽母２隻を中心とした小規模のものでしたが……その海域を客船が

通っていたために、哨戒中の艦娘達が駆け付け、撃退した模様です」

老人の傍らにつくのは、海軍の女性士官服を纏った女性。焦げ茶色の長髪をポニーテールに纏め上げ、片手には室内に似つかわしくない赤い和傘を下げている。

その女性はもう片方の手に握った報告書を静かに読み上げていた。

「その辺りは名古屋軍港基地の管轄であったな……黛大尉の艦隊か？」

「いえ、報告によれば……此度の対応に当たったのは戦艦山城、駆逐艦の時雨、暁、それから二航戦の蒼龍と飛龍だそうです」

女性は、少し驚いた様子で報告を行う。参謀長と呼ばれた老人も、思わず嘆息していた。

「あの磯部中佐の艦隊か……意外だな」

参謀長の知る限り、その男は中佐でありながら評判はよろしくない。現場にほとんど出てこないで常に安全な司令室で無茶な指揮を出してくる。

そのうえ作戦伝達も一方的で、作戦内容そのものも杜撰な指揮が多い。そのため、艦娘からの評判は軒並み最悪と言われていた。

（そんな男がこの緊急事態に的確な指揮を執ったというのか……だとしたら、評価を改めるべきなのか――――）

にわかには信じられないが、だとしたらこれまでの評判、評価も改めねばならない。

「それが……指揮を執ったのは磯部中佐ではないみたいです。偶々乗り合わせていた中尉が暫定的に指揮を執って撃退した……と、時雨からの報告です」
「何だと?」

　それから数時間後……
「全く……あ奴め、あれほど軽率な行動は慎めと言っただろうが。着任してもおらんのにはしゃぎおって」
　詳細な報告を受け取った参謀長は、執務室の机に突っ伏して盛大な溜息をついていた。その手に持った報告書には、端正な顔立ちの青年の写真が写っている。
「……まぁ、ともあれ被害を出さなかったのは良しとしよう。軍令部総長にも一応報告しておいてくれ」
「まさか、彼だったとは……これは面白い事になりそうですね」
　一方、ポニーテールの女性……大本営直属、主力艦隊の総旗艦『大和』は、参謀長とは対照的に微笑ましげな表情でその写真の青年を見つめていた。

（立派な提督になる……か――――強くなったわね、誠太郎ちゃん）

＊

かつて、幼い子供達が小さな約束を交わした……

その約束は１２年の時を経ても色褪せる事無く、少年と女の子の心の中で静かに生き続けていた……

そして、時を経て２人が邂逅する瞬間とき――――

子供達の思い出は、再び動き出していく――――!!!

第弐話―前編

３月２０日　　広島県　江田島海軍兵学校

「第１００期卒業生、山口　誠太郎候補生。さきの提督資格取得試験において、座学、実技における貴官の成績を吟味し……今この時より『提督』の資格、及び規定に則り、中尉相当官の資格を授与するものとする」

学長室に呼び出された青年を待っていたのは、待ちに待っていた朗報であった。

５年に一度行われるこの資格試験。

この日の為に、十数年にわたって勉強を積み重ねてきた。ときには演習や先人達の行う研修にも自ら参戦し、戦術の考案や指揮を実際に執ったりもした。

挫けそうになった事は片手では足りないくらいあったが、それでも挫折はしなかった。そんな時は、自らの根底にある『約束』が自分を奮い立たせてくれていたから――

そうして積み重ねてきた結果が今、こうして実を結んだわけである……

逸って小躍りしたくなる身体を抑え、青年は厳かな調子で敬礼していた。

「恐悦至極に存じます。これより提督として、更なる研鑽を重ねていく所存であります……!!」

「それと……大本営から貴官に直接の伝文がある」

学長と思しき初老の男性は、少し間を開けて続ける。それと同時に、傍らにいた秘書官が電報を手渡した。

「これは……」

「海軍参謀長、山口　源児中将……四代目『山口　多聞』閣下からのお達しである――――二週間後の４月３日を以て、貴殿を名古屋軍港基地第８司令部の提督補佐官とす

る。直ちに荷物を纏めて名古屋へ向かう様、支度せよ」

＊

3月31日　和歌山県　潮岬沖合

ぽとっ……

甲板に一滴の雫が落ちた

「せー……ちゃん――――――ホントに、せいちゃんなんだね……」

それは、その1粒を皮切りに止め処なく溢れていく。まるで、凍りついた雪が太陽の熱で雪解け水へと変わっていく様に……

「っ……ぁ、あれ??なんで私、泣いちゃってるの……やだ、止まらないよう」

堰を切ったように甲板におちていく熱い水滴は、緊張していた飛龍の顔をフニャフ

ニャに綻ばせていく。
「ひっ、ひなちゃん??」
眼前の青年―山口　誠太郎―は、１２年ぶりに再会した幼馴染が突然泣き出した様子に仰天。
「ご、ごめん！何か悪い事したかなぁ？」
「ううん、違うの……こんなところでせいちゃんに逢えるなんて思ってなかったから、何だかうれしくて――――嬉しいって感じたら、今度はなみだ出ちゃって……」
少し頬を赤らめて誠太郎を見上げる飛龍。一方、彼女に見つけられる誠太郎は、慌ててポケットからハンカチを取り出していた。
「ちょ、ちょっとじっとしてて」
そのまま飛龍の顔の前まで進み出ると、丁寧な所作で顔を拭っていく。
「い、いい、よ…こんなの、自分で――――」
「いいから、動くの少しだけ我慢して……こんなクシャクシャの顔で帰したら、みんな心配してしまうよ？」
流れるような指遣い。ちょっと控えめで穏やかな口調。そして、そこに微かに感じられる懐かしさ。

「むぅ……やっぱりせいちゃん、変わってないなぁ」
飛龍も思わずそんな事を言ってしまう。

「あ、あのーーー……士官殿？」
そんな2人に、唐突に横合いから声が掛けられる。
「……？」
その声につられて、誠太郎が何気なく振り返ると……

「こ、こんな事を言うのは水を差す様で申し訳ないのですが……あと1時間で港に到着いたします。そろそろお部屋に戻られた方がいいかと思うのですが……」
何故だかそこには、頬を赤らめている添乗員や船員の方々が自分達を揃って見つめていた……

「うわぁ！ご、ごめんなさいッ」
四方八方からの黄色い視線に晒された2人。我に返った誠太郎はというと、慌てて頭を下げて回っていた。

そして……

「あ～～～ん～～～～～たぁ～～～～～～～…………」

よく見ると……何故だか添乗員の方々に交じって、青緑の着物を纏ったツインテールの少女の姿がチラチラと……

「うちの飛龍に何てェ事してんのよッツッ！このド変態すけこまし男がァ～～～～～！！！！！！」

＊

客船から木霊する蒼龍の怒声を聞きながら、時雨は額に手を当てて項垂れていた。

「えっと……あれ、止めなくていいの⁇」

隣では、暁が若干引き攣った表情で問い掛ける。が、山城がそっと制していた。

「暁ちゃん……世の中にはね、『触らぬ神に祟りなし』って諺があるのよ。今の蒼龍は時雨にだって止められないと思うわ」

港に着くまで船に乗せてやれと提案したのはいいけれど、やはり飛龍が心配になったのか、こっそり乗り込んでしまった蒼龍……

元々、寄宿舎時代からの長い付き合いであるだけに、親友である彼女の事を非常に心配しているのだろう……というのは、山城達にも理解できていた。

「あちゃ、やっぱりか……」

最も、こんな素っ頓狂な悲鳴を上げるとは予想できなかったが……

「ん？」

客船から聞こえてくる大声に耳を傾けていると、時雨は持っていた通信機が点滅しているのに気付いた。司令室からの呼び出しだ。

「提督からの督促……」

それを見た瞬間、時雨、山城、暁の表情から一気に気の抜けた感じが消し飛んだ。

「思ったより早いわね。もう少し待ってくれても良かったのに……」

今度は先程と違い、うざったそうな表情で通信機を摘み上げる山城。

「……仕方ないよ、哨戒任務から急遽の出撃だったんだから。報告書のノルマだってまだ足りてないみたいだし」

見ると、時雨も先程より起伏の少ない表情で溜息を尽いている。

「こちら時雨、出現した敵戦力は全て撃墜致しました。これより船を先導して潮岬へ向かわせます……ただ、飛龍が中破。早急に高速修復剤の使用許可を申請させて下さい」

＊

「と、とりあえず中に入ろうか。潮風は怪我によくないし……」

「そ、それもそうだねぇ……それじゃ行こっか」

足を怪我している飛龍を介抱しながら、誠太郎は甲板を後にする。途中で飛龍が躓いたりしないよう、注意を払いながら階段を下りていく。

「って、あんた達、さらっと私を無視してんじゃないわよ……聞けコラぁ!!!」

「えぇーーっと……せ、せいちゃん？」

「その足は辛いだろ？取り敢えず、応急処置だけはしないとマズいよ」

誠太郎の個室に通された飛龍は、備え付けのベッドに横たえられていた。隣では、誠

太郎が乳鉢と乳棒で何かをゴリゴリとすり潰している。
「そこの君、えぇーっと……」
「蒼龍よ、飛龍（この子）と同じ正規空母」
機嫌が悪いのか、そっけなく答える蒼龍。そんな彼女に、誠太郎は水筒と清潔な布を持たせる。
「その水筒にはお湯が入ってる。今から薬を混ぜるから、この布を浸してほしい……温いけどぶちまけない様に気を付けて」
言うが早いか、彼は乳鉢の中の粉末をザザーッとお湯の中に放り込んだ。程無くして、湯が深緑に変わっていく。
「よし、今だ」
合図と共に、蒼龍が渋々布を浸す。
「後は水気を切って、傷の部分に沿えるんだ。その上から軽く包帯を巻いて……そうそう、そんな感じ」
的確に指示を送る誠太郎。程無くして、焼け爛れた傷が痛々しかった飛龍の右足は包帯でコーティングされてしまっていた。
そこから間髪入れず、誠太郎は足に布を巻いた保冷剤を添える。即席の傷口冷却（アイシング）をしている様だ。

「士官殿、これしかありませんが宜しいですか?」
そこに、今度は客室係が松葉杖を持って現れる。
「ええ、お借りします。これで応急処置はＯＫですよ」
受け取った松葉杖を飛龍に渡して、誠太郎はようやく一息ついていた。

「せいちゃん、さっきから気になってたけどこれって一体……」
「薬草だよ、乾燥させたのを粉末にしてお湯に溶かしたんだ。これは裂傷にも効くし、殺菌作用もある。ついでに簡単なアイシングもしておいたから、基地に着くまでなら十分凌げる筈だよ」
そう言いながらも松葉杖を調整し、飛龍に合った高さを即座に算出して締め直している。
「ふ～ん、随分と器用なのね」
蒼龍もジト目で誠太郎を睨んではいたが、どうやら手際の良さだけは認めている様だ。
「本の知識だけじゃ、頭でっかちになるからね……お祖父様にも色々仕込まれたしさ」
よく見ると、まくり上げた両腕にはチラチラと小さな傷痕が無数に付いている。左腕に至っては、完全に治りきらず半ば瘢痕化しているものもあった。

「けど、おかげで今の仕事が出来る。そう思えば、満更悪いものじゃないよ」
やがて彼は巻くっていた袖を戻すと、機材をサッサと片付け始めた。
「あ、私も手伝うよ」
「いやいや、こんなの自分1人で大丈夫。陸に着いたらまた海路を進まなきゃいけないと思うし、ひなちゃんはゆっくりしておいて」
「そーよ、飛龍はやんなくていーの。あたしがやっとくから無理しないで寝てなさい」

ジリリリリリリ……

船内に到着を知らせる放送が流れたのは、2人が荷物を片付け終えて間もなくのことだった。

＊

その頃……愛知県　名古屋軍港基地

「飛龍が中破しただァ?」

５階のやたらゴテゴテした内装の部屋。その中心で、電話を片手にいきり立つ男の姿があった。

海軍伝統の白服を纏ったその男。首元には桜の階級章が２つ取り付けられており、その男が「中佐」の地位にいる事を物語っている。

「何やってんだよマヌケッ!そんな寡兵にいいようにあしらわれるなんて、お前等仕事ナメてんのかぁ??」

とはいえ……この中佐、磯部　圀崇の口から出てくるのは、中佐という要職らしからぬ低レベルな雑言ばかりである。

（飛龍が……全く、あの娘ってば）

そんな上官の傍で、女性は今日何度目になるか分からない溜息を尽いていた。

巫女装束を意識した衣装、それに楕円形の分厚い眼鏡をかけている彼女の名は『霧島』。この名古屋軍港基地において、磯部率いる第８司令部の秘書艦として属している女性である。

その彼女をこうして陰鬱にさせている原因は、まさに今、目の前にあった。

「あれは貴重な資材だ！いずれ起こる大規模作戦に使うべく温存しているのに、そんなチンケな仕事に使わせるなよ！分かってんだろ！」

目の前でギャーギャー騒いでいるこの上官は、打診された高速修復剤の使用申請をにべもなく突っ撥ねている。恐らく来たるべき大規模作戦に備えて修復剤は温存しておきたいという腹なのだろう。

バカバカしい！

そんなものをケチって負傷を放っておくなんて、こいつは「もしも」と「妄想」の区別もつかないのか??

飛龍は（蒼龍も）正規空母。現在の主力艦隊における機動旗艦『赤城』、軽空母にして主力艦隊の副総旗艦を担う『鳳翔』を筆頭とする空母達は、海戦においては非常に重宝される存在。多数の航空機隊を運用できる彼女達の存在は、ときに火力以上に戦力図さえも左右することだってある。万一損失する様な事があれば、機動部隊そのものの士気、戦力をもれなく低下させてしまうだろう。

そうでなくても、艦娘の多くは元はれっきとした人間。海軍においては階級を有しない「特務官」扱いだが、現段階において海戦戦力の大半は彼女達に依存していると言っても良い（最も、中には階級を持っている艦娘もいるのだが）。

提督とは、その艦娘達を適正に指揮し、戦力として運用するための特別な指揮官のこと。決して彼女達を支配できる存在ではないのだ。にも拘らず、こいつときたら……

ここで修復剤を使いさえすれば飛龍の中破はたちどころに回復。提督がちょっと報告すれば、最悪でも小言を言われるだけで済むだろう……この男はそれが許せないらしい。自分の点数や評価の事しか頭にないのだろうか……!?

そう思うと、何だか腹も立ってくる。

しかし、こんなところでキレるなんて、それこそ言語道断。自分だってそこまで短絡的じゃない。

「ったく、飛龍のヘマのせいで無駄な出費が出るじゃないか。あいつら絶対俺の事バカにしてんだろ!!そう思わないか!?」
やがて、通信が終わったのか磯部は盛大な溜息を吐きながら乱暴に腰を下ろした。
「全く……ちょっとその出費を融通してくれれば飛龍だって万全に戻る筈ですのに」
「何度も言わせるな、第一、あんな小規模な戦いで高速修復剤使ったなんて知れたら、それこそ笑い者になる。あいつらじゃなくて俺が責任取らされるんだぞ」
どうやら、全く聞く耳持ってくれないらしい。全く、こんな調子では日々奮闘している飛龍達が報われない。
「……わかりました。ですが、せめて長時間の入渠はさせてあげて下さい。万一、これがもとで彼女を轟沈させたなんてことになれば……」
せめて、皮肉で返してやるのが精一杯だった。
「……貴方の首も、覚悟して貰いますよ」
思いきりドスの効いた視線を以て。

「あぁ、それともう1つ……4日後の20時を以て、大本営の命を受けた補佐官がこちらに着任いたします。そちらもお忘れなきように……」

＊

和歌山県、潮岬港
深海棲艦の襲撃から逃れた客船から、乗客や船員がわらわらと降りてくる。
その中で、2人の人影に付き添われた緋色の着物の少女が松葉杖をつきながら歩いてくる。
「ふ～ん、松葉杖ってこうやって使うんだ……」
緋色の着物の少女……飛龍は、包帯の巻かれた右足を庇いつつ、左手で杖をついて歩いていく。
「まぁ、昔は痛い方の手でつくのが多かったみたいだけどね……でも、それじゃかえって身体のバランスを崩してしまう。こっちの方がいいんだって」

やはりこういった事は手馴れているのだろう。誠太郎は労わる様に優しく助言を送っている。

「う～むむむむ……」

そんな2人の後ろでは、何故か蒼龍が複雑そうな目線で睨みつけていたが……

「飛龍～～～」

暫くして、客船の傍から誰かの声が聞こえた。見ると、黒いおさげ髪の女の子がこちらに向かって手を振っている。彼女も艦娘の様だ。

「時雨」

蒼龍がそれに気付いてそちらに駆け寄る。時雨と言われた少女は、軽やかなステップで海上から埠頭にジャンプしていた。

「ん、そっちは……」

そこで、飛龍の傍にいた誠太郎の姿を見とめる。

「時雨～～～、飛龍は大丈夫なの???」

「1人で行かないでってば～～～～～」

程無くして、残る2人も艤装を解除しながら陸に上がって来ていた。

「海軍、中尉相当官の山口　誠太郎です。此度は本当にありがとうございました」
　客船の乗客たちから少し離れたところで、誠太郎は艦娘たち全員に挨拶をしていた。制服ではなく小洒落た余所行きのスーツ姿であったが、海軍士官らしく敬礼する姿は中々様になるものであった。
「名古屋軍港基地第８司令部所属、白露型駆逐艦『時雨』です。こっちは暁型駆逐艦、『暁』ちゃんと、扶桑型戦艦の『山城』です」
　誠太郎の前に立つ時雨が、皆を代表して敬礼を返した。
「この度は御手を煩わせてしまって、申し訳ありませんでした……ですが、指揮を執っていただいた事、感謝いたします」
「いやぁいいですよ。突発的な事でしたし、その場で出来る確実な方法を取るしかなかったですから……寧ろ、あんな急ごしらえな作戦を信じて貢献してくれた事に、自分の方が頭が上がりません」
　誠太郎の姿勢は、今まで時雨達の見てきた海軍の上官達とは少し異なるものだった。

まだ年若いせいもあるのだろうが、物腰は穏やかで謙虚。それに加えて自分達にも敬語と敬意で接している。

毎回「上から目線」のあの提督とは本当に大違いだ。

「ふ～～ん……ま、確かに今回はアンタたちのお陰で危機は乗り切れたわね……っていうか、何なのさっきの作戦は!?」

一方、山城は先刻の荒唐無稽な作戦が腹に据えかねたのか、不意に身を乗り出して誠太郎に詰め寄ってくる。

「あんなの決まったからよかったけど、下手こいたら集中砲火で全員海の藻屑になってたわ！ここまで死ぬかと思ったのは初めてだったわよ!!」

「まぁいいじゃない。大成功だったんだから……そりゃいつもより怖かったけど、でもいつも以上にスカッとしたわよ」

そんな山城を、暁が押し止める。

「まぁ、皆色々言ってるけど……それでも僕達は中尉がいてくれてよかったと思います。飛龍だって」

時雨がそう言うと共に、傍に来ていた飛龍がそっと誠太郎に会釈していた。山城は未だに煮え切らない形相ではあったが……

「そうだったね……自分も感謝してるよ」

しかし……やはり、長い間会えなかった幼馴染と再会出来た事、そっちの方がこの2人には嬉しかったらしい。目線があった途端、飛龍が少し恥ずかしそうに俯いていた。

ぎゅううう！

「あ痛たたた！」

そんな誠太郎の背後では、何故だか笑顔の蒼龍が彼の臀部を思いきりつねり上げていたとか……

「さてと……それじゃ名残惜しいけど、僕達はこれで帰投だね」

暫く和気あいあいとした時間が続く……かと思ったら、不意に時雨がそう切り出した。

「そ、そうか、そろそろ君達も戻らなきゃいけないな」

尻を痛そうにさする誠太郎も、それを理解した様にポツリと呟く。

「そうね……あんまし長くなかったけど、これであんたの指揮下からは外れるわ。ほら飛龍、蒼龍も、帰るわよ」

山城も同感らしく、やや投げやりに2人を読んだ。

既に太陽は西の方に傾き始めている。あと数時間もすれば、空も夕焼け色に染まっていくだろう。

飛龍達は日没前に名古屋に戻って報告をしなきゃいけない。流石にこれ以上時間を潰すわけにはいかないのだ。

「ふぇ、もうお別れなの??」

しかし……飛龍は釈然としない顔で誠太郎と蒼龍を交互に見る。

「いや、そーでしょ。そろそろ帰らないと霧島さんがお冠になるわよ」

これには蒼龍も呆れ顔。やれやれと言わんばかりに目の前の同輩を見遣る。

「大丈夫だよ。僕だってもう海軍なんだし、そのうち何処かでひょっこり逢う事だってあるさ。心配しなくていいよ」

一方、誠太郎は気にするなと言わんばかりに苦笑する。そのまま徐に飛龍の傍にやって来ると……

ぽふっ

その頭に手を添えていた。

「せぇ……ちゃん？」

「……覚えてる？ 2人で泣いてた時はいつも菜月（なつき）姉さんがこうしてくれたこと」

まるで幼い妹に言い聞かせるように、誠太郎は飛龍に向かって話しかけていく。

（これって、これって……お姉ちゃんが私達にやってた事じゃない！ だ、だけどせいちゃんが私にやってくれて、それでそれで…………～～～～～～～）

一方、頭を撫でられていると認識した飛龍は………見る間に顔面が真っ赤に染まっていく。

「ふにゃあぁぁぁぁ～～～～～～～～～～～～！！！！！！」

「ふがーーーーーーー!!!!な、な、な、何やってんのよアイツ～～～～～!!!」

さりげなく思いがけない行動をとった誠太郎。それを見るなり蒼龍は髪を逆立てて絶叫していた。

「わわわ……あ、あんなことまでしちゃうの～～～～～????」

暁は両手で顔を隠しながら、指の隙間からちらちら2人の様子を垣間見ている。心なしか興奮している様でもあった。

「へぇ、まるで兄妹みたいだ……幼馴染ってのも納得いく話だね」

「何だか、小さい頃の私と扶桑姉様みたいね……」

一方、時雨と山城は冷静な様子で静観している。

「そ、それじゃあ僕達はこの辺で～～～～～～」

「またいつか何処かの海で逢えるといいわね!!」

時雨と暁が、放心状態になってしまった飛龍を抱えて海へと戻っていく。
「けっ！二度と会いたくないわよ、バァーーーカ!!」
最後尾の蒼龍が去り際にアッカンベーをしてそのまま高速で水平線の彼方へと走り去っていくのを見ながら、誠太郎も何処かホッとした様に肩を落とした。
「さて……船の出航までまだ時間があるな、僕も戻るとしようか」

＊

「それで……」
紀伊半島が見えなくなったころ、蒼龍は徐に問い掛けた。
「飛龍……あのヒョロ松は一体何なのよ？」
やや不機嫌さを露わにして……
「あ、それ私も気になるわ！」
それが聞こえたのか、暁も速度を落として飛龍の横に並ぶ。
「ヒョロ松……もしかして、せいちゃんの事？」

「他に誰がいるってのよ？」

キョトンとした顔で首を傾げる飛龍に対し、蒼龍は呆れた様に口を尖らせて呟いた。

「山口　誠太郎――――――私はずっと「せいちゃん」って呼んでたけど、１２年前まで一緒だった幼馴染なんだ」

まるで昔を懐かしむような表情で、飛龍はクスッと笑みを浮かべた。

「……山口　誠太郎、か……とすると、彼が『五代目』の――――」

先頭で聞き耳を立てていた時雨。彼女の微かな呟きは、誰の耳にも入る事は無かった……

第弐話―後編

3月31日　京都府　舞鶴

♪～～～～～♪～～～

「ん？」

不意にかかってきた携帯を手に取って、女性は徐に通話ボタンを押す。

「はーいもしもし……」

『菜月姉さん――――友永　菜月少佐、御無沙汰しております。中尉相当官の山口　誠太郎と申します』

聞こえてきたのは、数か月ぶりに聞く幼馴染の声。

確か、数日前に提督資格取得試験を受けたという話だったが……

「久し振りね、せーたろー。あんたも遂に提督になったのかぁ」

『はい。先日、合格の報を受けました。それに伴い、配属先も決まりました』

幼い頃から比べてやや大人びていたが、それでも電話越しに伝わる雰囲気は小さな頃から変わっていない。

そう思うと、女性の口元にも自然と笑みが浮かんでいた。

「ふふっ、まずはおめでとさん♪これからあんたも同じ職場で働くことになるんよねぇ――――そうそう、陽菜も艦娘になったって、呉のお父ちゃんに電話してきたわ」

本来なら職務中なのだが、今は休憩時間中。そのせいか、女性の口調も普段の厳格なものではなく何処か砕けた、楽しんでいるようなものに変わっていた。

『――――ついさっき、会ったんです』

だが……電話の向こうから聞こえた言葉に、一瞬だけ表情を強張らせてしまう。

そして……

「そう……そう……うん、わかった」

暫く電話を聞いていた女性は、やがてふぅっと深く息を尽いてから徐に口を開いた。

「ま、あんたが心配する事じゃないわ。あの子の赴任先には祥鳳だってヘルプで出張してるし、男があんまり女の子にずけずけ突っ込むもんじゃなくてよ」

『そうですか……わかりました。ありがとう――――菜月(なつき)姉さん』

(全く…あのお祖父様にしてあの孫あり、ねぇ)

通話の切れた携帯を優しく仕舞うと、友永　菜月少佐は徐に窓の外を眺める。

西に傾いた陽の光が、舞鶴の港町を綺麗な橙色に染めていく――――――この瞬間が、彼女は大好きだった。
（せいぜい頑張んなさいよ、せーたろー……♪）

＊

名古屋軍港基地に、夕焼けの光が降り注ぐ。
その穏やかな橙色に照らされる水面に今、艦娘達が帰投し始めていた。
「よっこら……しょっ！」
先に岸壁に上がった蒼龍の手を借りて、飛龍は海から上陸する。松葉杖は返してしまったため、基地までは皆と一緒に戻ってきたのだ。
既に先程の余韻は抜け、今はもう赤くなったり火照ったりはしていない。
「急な任務、お疲れ様。皆、大丈夫だった？」
そんな彼女達を出迎えてくれるのは、同じ艦娘の1人。第8司令部の秘書艦を務める霧島だ。

「あ、霧島さん……飛龍以下、第８独立混成艦隊！只今帰投いたしました!!」
霧島の姿を見つけた飛龍は、パタパタと足早に駆け寄っていく。
「……って、痛たたた」
最も、すぐに痛みで蹲ってしまっていたが……
「あら？その足……誰かに巻いて貰ったの??」
一方、霧島は飛龍の右足に巻かれた包帯に気付いた。
「船に乗り合わせていた中尉さんが、応急処置をね……」
それには時雨が応じ、暁もうんうんと首を縦に振って頷く。
「そう……」
やや安堵したような表情で、霧島は帰ってきた仲間達を見つめていた……
「……それじゃ、その中尉さんが指揮を執って貴女達を助けてくれたのね？」
「かなり急ごしらえな作戦だったけどね。でも大成功だったわ」
暁や時雨達から事の仔細を聞き、霧島は歩きながらスラスラと報告書を書きあげてい

く。
「こっちはヒヤヒヤしたわよ。いつにもまして今日は不幸だわ……」
「そのうえ、帰ったらアイツのお説教でしょ？もうやんなっちゃう……こんなんじゃ、艦娘になった意味、無いよ……」
だが、司令室に近づくにつれて霧島以外の面々は次第に沈んだ表情になっていった。
「あうぅ……せっかく会えたのになぁ」
飛龍に至っては、幼馴染と別れてしまったショックの方が大きいのか、他の艦娘達より3割増して落ち込んでいる。そのうち背骨が曲がってしまわないか心配だ。

「飛龍、貴女は蒼龍と一緒に入渠してきなさい」
「え？」
沈んだ表情の蒼龍達に霧島が唐突に言ったのは、司令室の扉が見えてきた頃だった。この部屋を素通りしていけば、入渠槽に直通するエレベーターがある筈だ。
「今は負傷の回復が先だわ。司令には言っておいてあげるから、飛龍にはまずそっちに行ってもらうわね」
そう言うと、霧島は飛龍に見えない様に軽くウインクを送った。

それを見た蒼龍は少し苦笑すると……

「そ、そうですね……さ、行こっ！」

やがて飛龍を引っ張って一緒に入渠槽へと歩いていった。

「さて……あの分からず屋に何て言ってやろうかしら」

その様子を見てた霧島は、今度は悩むようなしかめ面で呟いたのだった……

＊

数分後、第８司令室

「……どういうことだ？」

暁と時雨、山城からの報告を聞いた磯部中佐は、目をヘビの様に細めて問い掛けた。

「つまり何だ……たまたま船に乗り合わせていた若造に指揮を執らせて追っ払ったと、そう言いたいのか!?」

「その様ですね。かなり場当たり的なものだったみたいですが、結果としては敵を壊滅

させ、こちらの轟沈はありません。とりあえず『結果オーライ』といったところでしょうか」

落ち着きのない磯部とは対照的に、霧島は冷静な表情で報告を読み上げていく。

「報告書は私の方で出しておきます。飛龍も入渠中ですし、この件はこれで……」

「あぁ待て待て待て、それは俺が出してくる。お前達はさっさと下がって待機してろ……それと、このことはあんまり余所で言いふらすんじゃないぞ」

しかし、肝心の報告書の事になると、何故か様子が一変。普段ならこういうことは丸投げにする筈なのだが……

（こいつ、自分の手柄に書き換えて提出するつもりね……）

こすい真似をする……そう思って、霧島は内心で唾棄したくなる気持ちをそっと抑え込んでいた。

（ったく、本当に異動願いでもブチ込んでやろうかしら）

そうなると、今度は何回も考えていた『異動願い』の事が頭に浮かんでくる。が、即座にその考えは打ち消された。

（まぁ、そうなれば逃げられるでしょうね……自分だけは）

もしも自分が移動したなら、きっと皺寄せは残った飛龍達に向けられるだろう。同じ

苦悩を味わってきた彼女達を見捨てる事など出来る筈も無かった。
ましてや、自分と山城以外はまだ１０代の女の子。普通であれば学校に通っていてもおかしくない、年端もいかない幼い娘達なのだ。放り出すことがどうして出来ようか??

この際人数分の異動願いを書けば、揃って離れられるかもしれない。場合によっては磯部を査問会議に引っ張り出す事だってできる。
が、精査するのはあくまで提督と人事部の仕事。もし受理されなければ、誰かが必ず割を食う羽目になるのだ。
そうなればあの男の事、ここぞとばかりにハラスメントを仕掛けてくるに違いない。
まだ少女である彼女達が、大人の男からの執拗なそれに耐えられるなど……

（……らしくないわね。ここまでアホな事考えるなんて）
気付けば思考も負のスパイラル。その事実が霧島を逆に冷静にさせていた。

「それと司令、４月3日の２０時の事ですが……」
「２０時？あぁ補佐官の事か。適当に挨拶してこいつらの御守でもさせといてやれ」
気分転換のつもりで話題を変えると、磯部は今度は面倒臭そうに返したのだった。

＊

その頃……

「む～～～～～」

入渠槽に身体を預けている蒼龍は、先程から何度目になるか解らない溜息を尽いていた。

「そ、蒼龍……さっきからどうしたの??」

隣で同じく入渠中の飛龍は、見るからに不機嫌そうな相方の姿に心配そうに問い掛ける。

「……別(べつ)にいーーーー」

普段なら調子良く返してくれるはずなのだが、今回は不機嫌な姿勢を戻そうとしない。原因は掴めないが、余程腹に据えかねている模様だ。

「そんなことより……あいつ一体飛龍の何なのよ、どう見てもただの幼馴染じゃない風だったわ。相当仲良かったように見えたけど――――――」

あぁ、わかった。

さっきから機嫌が悪いのは、『彼』のことがあるからか……

元々、寄宿舎でルームメイトだった頃からの付き合いでもあり、飛龍には蒼龍の考えている事が手に取る様に分かった。

「そ、そんなテンパって言わなくても……私だって12年間ずっと会ってなかったんだし、あそこで再会するなんて思ってなかったんだもん」

とはいえ、こんなに不機嫌な彼女を見るのも初めてのこと。これは、後々彼女を宥めるのに骨が折れるやもしれない。

「でも……せいちゃんってば、全然変わってなかったなぁ……」

昔の面影を多く残した幼馴染の顔を思い出し、飛龍はまたクスッと笑みを浮かべていた。

「あ……まーたアイツの事考えてるわね！」

「うぇッ、そ、そんなこと無いよ～～～～～」

＊

これより少し前、
マラッカ海峡沖合

『……信号が消失、やられたか』
西に向き始めた太陽。その光の映える岩礁の上で、その人物は舌打ちしながら空を眺めていた。
海水に濡れながらも艶やかさを決して損なわない銀の髪を指で弄り、もう片方の手には長い杖上の物体を握っている。そして傍らには、大きな異形の顔を思わせるクラゲの様な何かが鎮座していた。
『チィ……目先の欲に駆られるからだ。たかだか「量産型」では正規空母に歯が立つわけ

もないのに』

しかし、端正な顔立ちに似合わずその目には不機嫌さの色が現れている。

『あらあら、今日はメッチャ機嫌悪くなぁい？』

そんな人物に、背後の海面から誰かが声をかける。

『紀伊半島を根城にしていた小規模隊が返り討ちに遭った……全滅だ』

岩礁に座る銀髪の人物は、振り返る事無く今度は歯軋りもしてしまう。今日の彼女はすこぶる機嫌が悪い様だ。

『舐めてかかるからだ、全く忌々しい……』

太陽は既に水平線の彼方に向けて沈み始めており、降り注ぐ日光も次第に赤みを帯びたものに変わっていく……

『「タ級」……我等の存在定義、今一度復唱しろ』

暫く凪いだ海を見つめていた銀髪の人影は、不意に背後の声の主に問い掛ける。

『大洋に進出した人間共（ホモ・サピエンス）を駆逐し、全ての海域を奪還せよ。我等の幾星霜よりの悲願を遂行せよ――――――違った？』

背後からの声は、調子の良さを損なわずにそう問いかける。

『そうだ、それでいい……そのために、目先の欲に捕らわれてはならない。我等の大義を以て、奴らからこの海を取り戻すためには……!!!!』

そう言ったと思うと、銀髪の人影は傍らに置かれていたクラゲのような物体を持ち上げると……

すぽっ……

何の躊躇いも無く帽子の様に頭に被った。

『そのためには、奴らを必ず排除しなければなるまい――――――――蒙昧な人間に従う艦娘共め……』

表情は端麗で美しい……しかし、その青い双眸には、夜の闇を思わせる昏い光がじわじわと満ち溢れていく。

『この程度で、立ち止まるわけにはいかないのだ――――――――次はこうはいかんぞ』

まるで怨嗟と憎悪と殺意が一緒くたになった様なその表情で、彼女――――深海棲艦『空母ヲ級』は、そのまま夜が近づく海面をただ見つめ続けていた……

『はぁ……アンタってホントに堅っ苦しい娘ねぇ。そんなんじゃ、モテないわよ』

ふと、海面にいる声の主が呆れた様に呟くのが聞こえた。

『貴様は戦艦のクセに気概が軽すぎるんだ。もう少し、姫様と一緒に落ち着きと度量を学べ』

『はいはい、考えとくわね。親衛隊長のヲ級ちゃん』

＊

翌朝、第8司令部

「はい……はい！その通りでございます。この私めの艦娘達が状況を判断し、現地で作戦を遂行したのです!!仔細は報告書にまとめている最中でございます!!!」

普段は低血圧と言ってあまり出てこない磯部が、今朝は妙なハイテンションで電話に応じている。

今朝一番に送ろうとした報告書の件らしい。

（……まぁ、「生放送」は既に赤レンガに送っちゃったから……というのもあるんだけどね）

そう思いながら、時雨は内心で溜息を尽く。

実は、時雨は主力艦隊の総旗艦、大和とちょっとした知人同士。そのコネクションを活かして、暴走しがちな磯部の監視役も買って出ているのだ（最も、仲間内でこれを知っているのは霧島だけだが）。

おかげで、昨日の紀伊半島沖の戦闘についての仔細は時雨が既に送り届けていた。赤レンガからそれを知らされた磯部が出鼻をくじかれた事は言うまでもない。

最も、報告書を出す前であったのはこの男にとって幸いだった。あのまま自分の手柄にして提出していたら、「虚偽の報告を行った」とみなされ言い逃れも出来ない状況に追い込まれていたであろうことは想像に難くない。

だが、流石は悪知恵の働く男だ。大本営からの電話を逆手にとって、芝居の様に都合のいいシナリオを誇張していく。

「しかしまぁ……何処の誰だか知りませんが、私の部下を勝手に運用するなど越権行為

も甚だしい。見つけたら厳重に抗議して貰いたいものです……はい、それではまたいずれ……」

ひとしきり言いたい事を言った後、磯部はドッカと安楽椅子に腰を下ろした。その表情には、先程振りまいていた丁寧さは消し飛んでいた。

「えぇい畜生！誰だか知らないが俺の手柄を横取りしやがって、ムカつくぜ!!」

言うに事欠いて、名も知らぬ新米に理不尽極まりない文句をぶつける磯部。本来なら自分が享受すべき功績を横から掻っ攫っていくなんて、何という恥知らずな奴なんだ！

自分が今さっきまでやろうとした事を棚に上げて、この司令官は怒りに打ち震えていた。

（ホント、この場に飛龍がいなくて良かったわ……）

昨日指揮を執った新米士官が、実は飛龍の１２年来の幼馴染だなんて知れたらどうなるか……霧島は、目の前で苛立っている司令官を横目で見ながら肩を落とした。

今、彼女（飛龍）がこの部屋にいたなら……まず間違いなく抗議していただろう。少なくとも黙っているとは思えない。

空母２人が朝練で弓道場に行っている事が、今の霧島には非常にありがたかった。

「ん……そうだ、今日は――――」

暫くして、霧島は昨日から念頭に置いていた事を想いだした。

本日は、大本営の命を受けた提督補佐官がこの第８司令部に着任するという事だった。

今回着任する相手は、現在の主力艦隊に携わる海軍高官の孫。つい先日、５年に一度の提督資格取得試験をパスしたばかりの新米だが、士官学校時代は優秀な成績で卒業している。

今季合格者の中で最も若いが、大本営の勅命で来るとなればそれなりに腕はあるのかもしれない。

が……一抹の不安も否応なしに生じてくる。

もし、その補佐官が今の司令みたいな性格であったなら……？

そうなれば、自分達にのしかかる心労は余計に大きくなるだけだ。あんなワンマン上司が２人もいては、正直堪らない。

親、親戚が軍の偉いさんだからと言って、鳴り物入りで入ってくる二世や三世なんて、恵まれた環境で育ってきた人物が殆ど。中には艦娘を露骨に蔑視するものや、場合によっては芸妓や付属品程度にしか考えない連中だっている。今の司令がまさにいい例だ。

こんな輩が、よくもまあ難関の資格取得をパスできたものだ……？とさえ思いたくなる。何処の世界にも認めたくない現実はあるものだ。

（せめて、真っ当な人が来てくれればいいのだけどね……）

太陽が昇り、キラキラと光を反射し始めた水面に視線を移しながら、霧島はまたフゥ…と溜息を尽いていた。

＊

１３：５５　名古屋軍港基地港湾地区

停泊する客船から、幾人かの乗客が降りてくる。その乗客と共に、青年はケースを転がしながら陸地へと降り立っていた。

多くの乗客が近郊のショッピングモールやホテルの方へと歩みを進めていく。しかし、青年は1人で大通りの方へとキビキビした歩調で進んでいた。

「ここが、名古屋か……確かに広島とは違うな」

堅苦しく止めていた第一ボタンを緩めて袖をまくり上げると、青年は改めて周囲の景色を眺める。

これまで過ごした呉も活気に満ちた場所であったが、この名古屋はそれ以上に大きな環境だと理解できた。

都会という往来の激しい場所であり、なおかつ貿易港も兼ねているために、平日だというのに人の往来は計り知れない。

一時は深海棲艦の出現によって世界中のシーレーンも軒並み損害を被っているのだが、それから半世紀近くを経て他国との交流や貿易も徐々に復活し始めていた。

この名古屋は、江戸時代の長崎と同じようにそんな貿易の最前線を担う玄関口でもある。軍事基地以上の要所であるがゆえに、赤レンガの傘下の中でも一、二を争う規模を有していられるのだ。

「え…っと、今回お世話になるのは……」

暫くして、青年は預かったＰＤＦ端末を取り出してノートパソコンに繋ぐ。呉を出立した時に吟味した電報をもう一度確認する必要があった。

「……ここか」

パッパーーー！

程無くして、データを確認した青年の耳に車のクラクション音が飛び込んできた。

＊

ヒュン!!!

風を切って飛んだ矢が、眼前の的に向かって吸い込まれていく。

そのまま的の中心に……

カッン……

行くことはなかった。大きくそれて下端に当たってしまう。

「随分とヘロヘロな軌道ね。余計な事を考えてる証拠よ」

今しがた的を外してしまった艦娘に対し、それを横目で見ていた人物がピシャリと言い放つ。

「うぅ、すみません……」

申し訳なさそうに謝るのは、先程から此処で練習していた飛龍。

「蒼龍、貴女も。一体何なのよこれ!?」

その隣で弓を射る蒼龍も、それはそれは散々たるものだった。もう十数本以上放っているのに、1本も的に触れていないのだ。

代わりに的の周りには、今まで射った矢がそこらじゅうにグサグサと残っている。力

んで使い続けたせいか、弓自体もカタカタと悲鳴を上げ始めていた。

「全く、2人揃って今日は一体どうしたの？飛龍は落ち着きなさすぎて矢がヘロヘロになってるし、蒼龍なんて力み過ぎて弓がこんなになっちゃってるじゃない」

蒼龍が使っていた練習用の弓を突き付けて、黒髪の空母娘―祥鳳―は苦い表情を浮かべていた。

彼女は第8司令部とは異なるが、同じ名古屋軍港基地所属の同胞（横須賀鎮守府からの出向）。しかも艦娘になる前は自衛隊随一のスナイパーと言われていた凄腕の逸材だ。

そして、この基地においては空母達の訓練教官も買って出てくれている。

「ご、ごめんなさい。何だか今日はその、落ちつけなくて……」

別に咎めているわけではないのに、なぜか飛龍は申し訳なさそうに謝る。

「いや、別に怒ってないんだけど……それより陽菜（ひな）、昨日の事で菜月（なつき）が心配していたわ」

「ふぇっ!!」

……が、不意に本名で呼ばれ、飛龍はビクッと身を震わせていた。

実は彼女は、飛龍の姉と自衛官時代からの知り合いでもある。故に、飛龍とも多少の付き合いはあった。

訓練生時代にもよく面倒を見てくれたし、今もこうして友人の妹を気にかけてくれている。まさによき先輩なのだ。

「あの娘、相当気にしてたみたい……落ち着いたら一報入れておいた方がいいわね」

「お姉ちゃんが……は、はい。分かりました……後で私から報告しておきます」

何故だろう？

今日はどういうわけか、調子が出てくれない。

いつもは快調な弓も、今日に限っては出鱈目な方向に流れるばかり。精神が安定していない証拠だ。

昨日、誠太郎と偶然再会してからというもの、心のどこかに少しだけ何かが引っかかった様なモヤモヤした感じが燻っている……

あんな形でお別れしてしまったから？
それとも、その後の提督のウンザリする様な愚痴を聞かされて、気持ちが急速冷凍されてしまったからか？
考えても考えても全く答えは出てくれそうにない。
このまま司令室に戻るのも、はっきり言って気が乗らなかった。

＊

「そんなにやる事無いんなら、後で気晴らしのショッピングにでも付き合ってくれるかしら？」
基地内の食堂施設「甘味処『間宮』 名古屋支店」でぼんやりしていた飛龍に、強引に相席してきた山城からそんなお誘いがあったのは、つい十数分前の事。
「蒼龍から聞いたわよ。あんた、随分あの中尉のこと気にしてるみたいね」
外出許可証を貰って出てきた直後にそう切り出されて、内心でビクッとする飛龍。
「な、なななな何言ってるのかなぁ山城さん。せいちゃんの事なんて全然！うん、全然！何とも思ってないって！」
「……うん、言わなくても解ったわ」

そんな呆れ顔の山城に強引にショッピングに連れ出されてしまい、今は2人揃って喫茶店でティータイムの真っ最中。

「まぁ、昨日の事はさておき……提督も「手柄取られた」って逆ギレしてるし、あまりそれに囚われるのはおよしなさい」

至極真っ当な言い分で飛龍を諌める山城。

「うう、ごめんなさい……」

今朝の事もあって、飛龍はぐうの音も出ない様子。現実にこうして支障をきたしてるのだから文句など付け様がない。

しかし……

（何なのよ、こんなシュンとしてちゃ小言も言えないじゃない……不幸だわ）

やはり、12年間も逢えなかった彼の影響は大きかった。飛龍とて頭では分かっていたとしても、感情がどうしてもげんなりさせてしまう。

「し、仕方ないわね……ほら、そんなんじゃまた提督に目ェ付けられるわよ。さ、気分変えてリフレッシュでもしに行かない???」

山城もそこは理解したのか、これ以上の小言は言わなかった。

＊

ばたん！

黒塗りのリムジンのドアを勢いよく閉め、青年は大きな白塗りの建物の前に立つ。

「ここが、名古屋軍港基地……か……」

「第８司令部。バカボンボンで有名な磯部　圀崇中佐の指揮する司令部……お前にゃ、本日２０：００から補佐官として着任して貰うぜ」

リムジンを運転してきた男は、煙草を取り出して素早く火を灯す。やがて、フーーと長い呼吸音と共に一筋の紫煙が立ち昇った。

「煙草、身体に良くないんじゃありませんか？加来（かく）大佐」

青年がそう言うと、加来と呼ばれた男は無言でポケットから小さなケースを取り出す。見ると、『禁煙パイポ』の文字がちらっと見えた。

「近くに小さい子供がいる手前、マナーってやつよ……それより、あっちの提督は色々悪い評判が立ってる。呑まれんじゃねぇぞ」

男は軽く煙草を咥えると、青年の胸に軽く拳を突き当てた。

「まぁ……お前はあんなのと違う。参謀長の地獄の訓練をパスした誇り、忘れるなよ。

『五代目』

リムジンが走り去った後、青年はふぅっと息を吸い込む。

「……さて、行くか」

そして、一歩先へとゆっくりと踏み出していった。

＊

「今日は本当にすみませんでした、山城さん」

今日購入した戦利品を大量に引っ提げて、飛龍は名古屋軍港基地のゲートを潜り抜ける。

「いいのよ、気分転換にはなれたみたいだし……それに、暁ちゃんや蒼龍へのお土産もＧＥＴ出来たしね」

山城の方も、疲れてはいたが穏やかな微笑を浮かべて飛龍の方を向く。

「さ、また仕事に戻る……わ、よ――⁉︎」

そうしてまた激励の言葉を出そうとした――瞬間、不意に一点を見つめながら硬直していた。

「山城さん⁉︎」

「あれ……君達は、もしかして――」

その時だった。

飛龍にとって、もう一度会いたかった人物の声が聞こえたのは――

―

「っ!?」

思わず後ろを振り向くと、

「やっぱり……また会ったね、ひなちゃん」

少々驚いた顔をしているが、落ち着いた雰囲気を纏った青年……12年来の友、山口誠太郎の姿がそこにあったのだ。

「え……???えぇ???――――――――――ふえぇ～～～～～!!!な、何でせいちゃんがここ名古屋にいるのぉ～～～～～～!!!!!!」

第参話―前編

4月1日夕刻、名古屋軍港基地第8司令部専用ドック

提督と書かれたネームプレートの置かれている席を挟んで、青年と幾人かの艦娘、作業服の職員達が向き合っている。

青年は海軍の制帽、紺を基調とした士官用の軍服を纏っており、艦娘達も普段の制服ではなく海上へ出る時の戦闘装束という出で立ちで佇んでいた。

本来ならそこにいるべき提督の姿が何故か見られなかったが、そんなことは誰も気にしていない様である。

厳かな様子で制帽を取り、艦娘一同に礼をする青年士官。対する艦娘達は、ある者は期待の目で、ある者は興味深そうに、はたまた迷惑そうに表情を強張らせている者だっている。

「それでは……予定の日時より前倒しになってしまいましたが、山口　誠太郎中尉相当

官。現時点を以て貴官を正式な中尉に昇格とし、我々第８司令部の提督補佐官として着任していただきます」

艦娘達の代表格として、秘書官の霧島が右手を差し出す。

彼女達と向かい合って立つ青年士官、山口　誠太郎は差し出された右手に視線を下ろすと、徐に左手で帽子を脱いだ。

「海軍中尉、山口　誠太郎。以後、大本営の勅命により第８司令部提督補佐官として着任いたします。なにぶん若輩では　ありますが……皆様のご指導、ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします！」

＊

２時間前…

「名古屋軍港基地とは聞いていたけど、まさかこんなに早く再会するとは……僕も驚いたよ」

ついさっきまで飛龍が持っていた荷物を片手に、誠太郎は彼女達と足並みそろえて基

地の廊下を歩いていた。
「ううん、私達の方がもっと驚いてるよ……だって――――――」
左手を歩く飛龍は、やや興奮したような口調で隣の幼馴染を見遣った。
「た、確かにこれはビックリね――――――あんたが第８司令部の補佐官になるなんて、蒼龍が聞いたらどんな顔するかしら」
同じく右手を歩く山城は、呆れと驚きの入り混じった複雑な表情で２人を眺めている。
「今度はヤキ入れられるくらいじゃ済まないかもしれないですね……」
そう言いながら、誠太郎は身を竦めていた。
「かもしれないわね……覚悟しときなさいよ、提督補佐官殿」

「あら、２人とも戻ったのね」
廊下を歩いていると、３人は誰かとバッタリ鉢合わせる。
「霧島さん」
曲がり角から現れたのは、第８司令部の秘書官である霧島。本日はお馴染みの戦闘装

束ではなく、深緑を基調とした制服を纏っている。
よく見ると両手に幾つものファイルを抱えていることから、きっと書類仕事の提出か何かだったのだろう……と飛龍は思っていた。
「ん、そちらの方は……???」
一方、霧島はというと……飛龍と山城の間に立っていた見慣れない人物に気付いたらしい。キョトンとした顔で彼を見ている。

「……初めまして、名古屋軍港基地の特務官とお見受けします。自分は本日付で第８司令部配属となる中尉相当官、山口　誠太郎であります」
誠太郎は霧島の視線に気付くと、その場で姿勢を正して敬礼をする。
「あら、そうですか……お初にお目にかかります、中尉相当官。第８司令部秘書官、金剛型４番艦の霧島と申します」
彼の無駄の無い簡素な敬礼。霧島もそれを見止めると、反射的に返していた。
（第８司令部配属……ふぅん、そういう事か――――――）
「まだ着任には早いかと思いますが……なるほど、先日紀伊半島でうちの子達の指揮

を取り、飛龍を介抱してくれた幼馴染って――――――貴方だったんですね」
　とはいえ、流石に秘書艦は伊達じゃない。飛龍がくっついている姿を見て、一瞬で全てを看破してしまう所は流石といえる。
「その節はご迷惑をおかけして、申し訳ありません。着任すらしていないのに出過ぎた真似をして……失礼しました」
「いえいえ、咎めてなんかいないわ。寧ろそちらの力量を図る事が出来て、こっちとしてはプラスってところよ」
　それに、先日の話を聞いたところでは指揮力、着眼点はまだ悪くない。多少荒削りで、一歩間違えれば窮地に追い込まれていたかもしれないのだが……それでも、磯部の杜撰な作戦に比べたらずっと出来は良い。
「それは何よりです……といっても、あの後参謀長から直々に小言を戴きましたが」
　やがて、誠太郎はやや肩をすくめて申し訳なさそうに俯いていた。
「確かにそうね……帝海軍法第６条『指揮系統統一法』。海軍の指揮系統において特定の司令部に所属する特務官（艦娘）を、該当する提督、ならびに補佐官以外の第３者が勝手に指揮することは、原則禁ずる……今回は緊急時だったためにやむをえなかったようですが、本来は資格停止もあり得る禁則事項……小言で済んだのは寧ろありがたいと思った方

がいいですよ？」

一方、霧島の方は少し険しい眼力で誠太郎を睨んで呟いた。

「それと、作戦も改めて吟味させて貰いましたが……あれはもう「奇策」の域ですね。相手が油断していた様だったから彼我の損害も無く大成功だったけれど、もし増援が来ていたら逆に皆が包囲されていた筈だわ。そうなれば、一気に畳み掛けられていたでしょうね――――――まぁお世辞にも満点には程遠いけど……それでも、相手の真理を見据えた戦術の構築は、急拵えながらも効果的に機能していました。取り敢えず、ビギナーズラックとしては良い方じゃないかしら」

そして、直後に不敵な微笑を浮かべて誠太郎の胸を軽く叩いた。

「少々予定より早いですが……山口　誠太郎中尉相当官。貴官を歓迎いたします――――――ようこそ、名古屋軍港基地へ」

＊

「は、は、は……これまた随分賑やかになりそうねぇ――――――不幸だわ」

半ば呆れた表情で誠太郎と霧島を眺める山城。

「ぷぅ～～～～」
隣では……何故か頬を膨らませた飛龍が恨めしそうな表情で２人を睨んでいる。
あの霧島に認められたのは良いが、せっかくの再会に水を差されたのはどうにも面白くないらしい。

（――――――――せいちゃんのバカっ、とーへんぼくッ）

それから数分後、甘味処『間宮』名古屋支店
ガシャン
蒼龍の手からスプーンが落ちる。
「甘味処『間宮』 名古屋支店」。限定で振舞われる日替わりデザートのうち、今日は楽しみにしていたプリン・ア・ラ・モードだったのだが……今の蒼龍には、それ以上に重大な問題が目の前に転がり込んできていた。

「な……なぁ……ななな……」
今まで浮かべていた笑顔は引き攣り、全身は信じられないものを見たという様にガチガチに硬直している。それほどまでに受け入れがたい状況が、目の前にあったのだ。

「何でアンタがここにいんのよーーーーーーーーーーーーッ!!!!!!!」

蒼龍の指差す先にいたのは、

「やぁ、昨日ぶり」

昨日紀伊半島で飛龍に不埒（？）な真似をしていた自称「幼馴染」の青年……誰あろう、誠太郎その人だった。

「いやぁすみません。あの時はまだ機密事項だったので着任先は明かせませんでしたが……改めて、以後よしなに」

「よよよ「よしなに」じゃなぁ～～～い!!な、な、な、何でここにいるのかって聞いてんのよ!」

慌ててるのか目を白黒させて誠太郎を指差す蒼龍。

「こら蒼龍、他人様をむやみに指差さないの」

そんな蒼龍を宥める様に、後から入ってきた霧島が強引に彼女の隣に座ってきた。

「あーーっ、1人でプリン・ア・ラ・モード食べてる～～～!ずーるーいーーっ」

その横から、今度は頬を膨らませた飛龍が顔を覗かせた。
「き、霧島さん!?飛龍も!?」

「彼は、これから第８司令部の補佐官として着任する中尉殿よ。失礼な事言っちゃダメ」
「んが?!?!」
そして……やってきたのは予想外の答え。それを聞いた蒼龍は、普段の彼女からは考えられない素っ頓狂な悲鳴を上げたと思うと――――そのまま硬直してしまう。
「蒼龍…蒼龍～～～???」
霧島は暫く目の前で手を振ったりしていたが、当の蒼龍は立ったまま固まってしまった模様。

同時刻、名古屋軍港基地　β会議室
「山口　誠太郎……だと!?」
『人事部に問い合わせてみたが、間違いない。正式な命令として既に受領されている――――おい、どうするんだ!?』
奥歯がガタガタ震えるのが分かる。呼吸も不均等で、全身に氷水をぶっかけられた様

なヒヤリとした悪寒が背筋を凍らせるのがわかった。

あの『山口　多聞』だと……!?バカな!!!!

かつてミッドウェーで名を馳せた猛将の血族が、自分の補佐官として来る……!?冗談じゃない!!!

自分が連絡した相手からの報告を受け、その男……磯部中佐は青ざめた表情で受話器を握り締めていた。

山口家は、艦娘に戦力を依存する現日本軍において影響ある血族『十家門』の1つである。

筆頭である山本家、次席である東郷家に比べて第6席と地位は高い方ではないが、現在の大本営最強の戦力である主力艦隊を直々に指揮する武闘派を多く輩出した生粋の軍人家系だ。

現当主である4代目『山口　多聞』こと、上級大将の山口　源児。彼は大本営におけ

る参謀長を務める老兵であり、今尚卓越した指揮力、統率力を有するベテランの提督として有名だ。その手腕は、海軍元帥である第3席の栗田　剛三をも凌駕するとさえ言われているほどである。

また同時に、この上級大将は第5席である南雲家と共に軍内部の監査部門を引き受けている。僅かな不正や綻びさえも、彼の息のかかった者達なら即座に見つけてしまうだろう。

だが、そんなことは磯部の頭にはない。

彼の思考は、それ以上の重大な恐怖で占められていたのだ。

「ふざけるな！あの事がバレたら俺もお前も身の破滅だぞ!!」

『そ、そうだが……しかしどうする!?』

暫く剣呑な会話を続けていた磯部であったが、やがて荒い呼吸を抑えて再び受話器を取った。

「……あ、安心しろ。奴の息子は俺の事は知らない――――――そのガキの任期が終わ

るまで乗り切ってやるさ、それにいくらでもやり様はある！」
『……わかった、お前に任せる。但し藪蛇にはなるなよ！』

暫くして、会議室の中には静寂が立ち込める。
その中で唯1人、顔全体に不気味な薄ら笑いを浮かべた男の姿が逆光に照らされていた。
（クヒヒ……そうだ、やり様はいくらでもあるんだからな――――――）

同時刻、甘味処『間宮』名古屋支店

「お？飛龍、それに霧島さんと山城さんと蒼龍も……珍しいわね」
「間宮」に立ち寄った暁は、奥の席に見知った第8司令室の面々が相席しているのを見つけた。
手前に霧島と山城、奥では二航戦の2人が向い合せに座っている。
これで自分と時雨が揃ったら、それこそ全員集合！となるだろう。
「あら、暁ちゃん？霧島さん達もいるから寄っていかない？」

そんな事を考えていると、後ろから誰かが声をかけてくる。
「あ、伊良湖さん」
現れたのは、「間宮」の名古屋支店を切り盛りする特務艦娘の伊良湖。暁が密かに憧れている「大人のれでぃー」の1人である。
「はろはろー、れでぃーがこんな所で何突っ立ってるぴょん？」
「こら、そこ立ってると通れないんだけど……どいてくんない？」
続いて現れたのは、伊良湖と同じエプロンを付けた2人の女の子。どちらも暁と同じ駆逐艦の娘だ。
「てゆーか、今日は暁シフトじゃないよね？注文運ぶんだからそこどきなさいって」
暁に食って掛かるのは、サイドテールに結わえた銀髪が特徴の艦娘、霞。後ろでのんびり眺めているのは、無邪気そうな風貌をした艦娘の卯月。どうやら今日のウェイトレスはこの2人らしい（ちなみに暁も別の日にこの店でバイトしている）。
「む？あそこにいるのは……おりょ？飛龍先輩じゃないかぴょん！」
そうこうしていると、卯月が向こうのテーブルに座る飛龍達を発見した。
「あら……？霧島さんと山城さんに蒼龍も、珍しいこともあるのね」
霞も向こうのテーブルの様子に気付いたのか、少しキョトンとした顔で首を傾げる。つられて暁もそちらの方を見る。

瞬間――――――

「え???」

その表情が不意に強張ってしまった。

「あ、あれってまさか……?!?!?」

同時刻、第８司令室

「それは本当かい？大和さん」

提督のいない司令室で、時雨はスマートフォンを片手に会話していた。

『えぇ、貴女達がもう会ってたのには驚いたけど……でも山口補佐官は間違いなくいい人よ。そこは保証してあげる』

「そっか、大和さんがそこまで言うならひとまずは安心かもしれないね」
ほのかな笑みを浮かべる時雨の傍では、カーキ色の軍服を纏った男性が静かに佇んで見守っている。
『参謀長も貴女達の事、結構気にしてるから……何かあったらいつでも言ってきてくれていいのよ?』
「て言うか……あの人は寧ろ、中尉の事の方が心配かもしれないよ……ちょっと「祖父バカ」な所もあるから」
少し皮肉の入った口調で、時雨は電話の向こうの女性にそう返した。
『そんな事無いのです。時雨も会ってみたらわかるのです』
そんな時だった。電話の向こうから別の声がしたのは……
「うぇっ!?」
一見あどけなさの残る女性の声。普通に聞けば少女と思ってしまうかわいさすら匂わせる……その声を聞いた途端、時雨は雷に打たれた様に背筋をピン!と伸ばして直立不動の態勢を取っていた。
「ま、マスター・プラズマ!?いらしてたのですか?」
『誰がプラズマなのですか!?私は電(いなずま)なのです。二度と間違えるな、なのです!』
電話に出たのは、時雨にとっては非常に印象深い相手らしい。先刻までの砕けた雰囲

気が瞬く間に霧散していた。
『全く、時雨は相変わらず一言多いのです……けど、源児は仕事に関しては孫だからって甘やかさない性格なのです。そこんところは時雨も知ってる筈なのです』
「あはは……そういえばそうでしたね。参謀長は私情は絶対に挟まない人でしたから」
久方ぶりに聞く教官の声に、時雨はまた苦笑していた。
『まぁ電に比べたらまだまだヒヨっ子なのですが……それでも素質はあるのです。とりあえず遠慮は無用、そっちで一丁揉んでやってほしいのです』
そんな時雨の心境を知ってか知らずか、電話越しの教官はあどけない口調で教え子に申し付けていった。

「あ、ごめんね長居して。迷惑かけちゃったかな」
「気にするな、俺も気にしていない」
暫くして……電話を切った時雨は、男性に向かって苦笑しながら呟く。話しかけられた男は、表情を変えずに静かに答えた。
「十家門の山口家、か……」
「うん、きっと昨日会ったのも何かの縁だと思うな……」

名古屋軍港基地に駐留する憲兵大尉、横井　純は制帽を直しながら廊下を闊歩する。時雨も真剣な表情で彼の後を歩いていく。

「まぁ、大和のみならずあのマスター・プラズマがそこまで推してるんだ……一つ、信じてみようじゃないか」

横井大尉はそう言うと、ずれていた制帽をサッと被り直していた。

「何にせよ、これで磯部中佐も喝が入ってくれればいいんだがな……」

「そうだね……この際そっちの岩村大佐も、提督のこと本気で査察してくれればいいのに――――ボク達のところ、典型的なブラック鎮守府なんだよ？」

「ハッハ、全くだ」

第８司令部のいけ好かない提督、そして名古屋駐留憲兵隊を率いる大佐の顔を思い出し、いつしか横井大尉も時雨も目を細めていた。

第参話―後編

甘味処『間宮』名古屋支店――

「な、なんで中尉さんが名古屋にいるの!?そんなの全然言ってなかったわよね!?」

「すみません、まだ着任前だったので、機密事項の観念から言えなかったのです……実際、僕も驚いてるんですから」

伊良湖が特別にサービスしてくれたバニラアイスを突きながら、暁は眼前でコーヒーを堪能する誠太郎を凝視していた。

「昨日一緒だった人達が、まさか自分の着任先の皆さんだったなんて……正直、思ってもみませんでした」

「ケッ、神様ってホント人の嫌がることするの好きなのねー」

「それは同感。その分私や姉様の不幸度を減らしてくれたらいいのにーー」

ジトッとした目つきで誠太郎に抗議の意思を向ける蒼龍と山城。彼の隣で幸せそうに破顔している飛龍とは大違いだ。

「いいじゃない。提督補佐官がついてくれるなら、こちらの気苦労だって軽減できるかもしれないわ」

「そうそう。何たって、せいちゃんとこれからずぅーーっと一緒だもんねーーーーーッ♪」

霧島と飛龍は、この年若い補佐官の着任を歓迎するかのように微笑んでいる。特に飛龍は、昨日の今日で再会出来た幼馴染の存在に心が躍り出すのが止められないらしい。

「こらこら、僕だって仕事でここに来てるんだから……公私のけじめはつけないとダメだよ」

一方、誠太郎は手元にあるコーヒーを軽く煽ると、真面目な口調で飛龍を諭す。

「ご、ごめん……」

カランカラーーーン……

来客を告げるベルの音と共に、食事処のドアがパッと開いたのはちょうどその時だった。

・

「ほう、これは珍しい。第8司令部の特務官殿が勢揃いしているとはな」

現れたのは、憲兵特有のカーキ色の軍服を纏った男だった。襟元の階級は、この大柄

な士官が『大佐』であることを示していた。
「岩本憲兵大佐……御無沙汰しております」
その人物に気付いた霧島が、即座に立ち上がって敬礼する。
一方、岩本と呼ばれた憲兵大佐は奥の席に座る見慣れない顔に気付いたらしい。彫の深い顔に射抜くような目線で件の彼を凝視する。
「……申し遅れました。此度、第８司令部の提督補佐官として着任いたしました、山口誠太郎中尉相当官であります」
一瞬の後、誠太郎は素早く立ち上がって敬礼していた。それにつられて飛龍達も一斉に敬礼を行う。
「中部方面第３２憲兵団大佐、岩本　貴明だ。今は名古屋軍港基地の駐留憲兵隊を任されている」
相手も誠太郎達の行動を見止めたのか、一呼吸遅れて敬礼を返していた。
「とはいえ……フン、磯部中佐の指揮下に入るのか……精々頑張ることだな」
敬礼を返したとはいえ、冷たさすら感じさせる目線で誠太郎達を一瞥する岩本大佐。やがて彼は鼻を鳴らすと、踵を返した。
「言っておくが……士官学校で好成績だったからと言って、現場で甘えは通用しないぞ。此処に来た以上は心して掛かる事だな」

そう言って、のしのしと自分の席へと歩いていく。

「ん？」

時雨と横井大尉が暖簾をくぐって表れたのは、ちょうどその時だった。

「あれ？貴方は……」

時雨の視線の先にいたのは、昨日見た年若い士官の姿。あの時と違ってちゃんとした紺の士官服を着こなしていたが、あの顔立ちは間違える筈もない。

「君は…？」

そして向こうも気付いたらしい。少し驚いたように目を見開いているのが分かった。

しかし、相手が時雨だとわかるとすぐに真剣な表情で会釈してくる。

「フフ……また会ったね、山口中尉相当官――――第８司令部の補佐官になるんでしょう？」

「君は白露型の……確か、時雨だったかい？」

一見、不敵とも取れる笑みを浮かべた時雨であったが、やがてクスッと微笑みを浮かべて席に腰掛けていた。

「御名答……それじゃ、これから僕達は同僚同士だね。以後よろしく♪」

「貴公が山口中尉相当官か……名古屋駐留憲兵隊の横井　純だ。以後お見知りおき願う

よ」

憲兵である横井大尉は、岩本大佐と同じように厳かな所作で敬礼をする。

「山口　誠太郎中尉相当官です。本日より第８司令部の提督補佐官として着任致します」

そして誠太郎も、横井に向かって敬礼を返していた。

「しかしまぁ、これはまた随分若いのが来やがったなぁ……が、いい気概だ。まぁ此処に来た以上は気楽にやろうや」

横井大尉は、岩本大佐とは対照的にフランクな態度で手を差し出す。

「ありがとうございます。ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いします」

誠太郎はその手を握り返すと、力強い表情で彼を見据えていた。

＊

「此処が工廠。艤装や装備の建造はこのエリアでやるの……大抵は妖精さんに資材を渡して発注しておけばやってくれるけどね」

甘味処を出た誠太郎達は、名古屋軍港基地の各所を歩いて回っていた。
あと幾許もしないうちに着任となるこの提督補佐官に、少しでも早く施設の様相を知って貰おう……という暁の提案で、誠太郎は幾人かの仲間と共に施設内を案内して貰っている最中だった。ちなみに今、彼について一緒に回っているのは飛龍、暁、蒼龍の3人だった（霧島は書類仕事、時雨と山城も別行動中、横井大尉は憲兵詰所に帰還）。
既に正面玄関、食堂、修復の行われる入渠エリア、憩いの場である甘味処と色々な場所を回り、今は建造を請け負う工廠に赴いてる最中だった。
「よーっす、あんた達お揃いでどーしたの～～～???」
幾つもの大仰な機械がデンと鎮座するこの区画に入ると、早速機械の上から大声が聞こえる。
「あ、ユリカさ～～ん!」
いち早く気付いた蒼龍が、顔を覗かせた人物に向かってピョンピョン跳ねながら挨拶をした。
「作業中すいませ～～ん、せいちゃ……提督補佐官に工廠を案内したいんですが、いいですか～～?」
飛龍が目を向ける先にいたのは、タブレット片手に作業員達に指示を飛ばしているツナギ姿の女性だった。赤みがかった髪をショートポニーに纏め、程よく焼けた顔とうな

じが特徴の彼女は、飛龍の姿を見ると作業を中断してこちらに向かって来る。
「提督補佐官だって？そーいや磯部のアホと霧島ちゃんがそんなこと言ってたっけ……そっちにいる連れのお兄さんが??」
ユリカと呼ばれたツナギ姿の女性は、誠太郎の姿を見止めてそう呟いていた。

＊

その頃――――
第８司令部の執務室では、何やらガサゴソと穏やかではない物音が木霊する。
「えぇい、これでもない！これか?!」
執務室に籠った磯部中佐は、先刻から金庫のダイヤル相手に悪戦苦闘している。
先程の電話の後、磯部は即座に執務室に引き揚げていた。艦娘達は今頃自由時間、この部屋に来ることは恐らくない。
磯部はこの隙に、何とかして身を守る術を立てておく必要に駆られていた。

（何で奴の息子が俺の司令部に来るんだ!?まさか、あの事を突き止めて……いや、偶然に決まっている！あれは１８年も前に済んだ事なんだ!!）

そう頭の中で思考を目まぐるしく巡らせる。やがて金庫のダイヤルから、カチッ…と何かが嵌まる音がした。

「フン……い、今に見ていろ、俺の平穏を邪魔する奴はどいつもこいつも――――――」

血走った目を走らせて、磯部は金庫の中の『何か』にゆっくりと手を伸ばした……

＊

その頃、工廠では……

「初めまして。本日より第８司令部に着任しました中尉相当官、山口　誠太郎です」

「名古屋軍港基地の整備班長、谷村　ユリカ准尉。以後お見知りおきを」

互いに敬礼して挨拶を交わす誠太郎とユリカ。

しかし、厳粛に思われた沈黙はすぐに霧散してしまう。

「なるほど、資材の配合率はこうなるのですか……試験で同じ問題は出ましたが、現場だと全く違いますね」

「あんなの頭でっかちな試験官が作った『最低基準』よ、坊や。現場じゃそんなマニュアル通りに行かないってーの」

気が付けば、２人とも資料片手で小難しい話に花を咲かせている。階級差はあれど、誠太郎の方が明らかに年下であることもあってかユリカは既にタメ口で会話していた。

「いい？現場は常に手探りと経験、試行錯誤で何でも打ち立ててきたの。そりゃ失敗の方が多いけど……けど、最前線の苦労も知らない試験官風情にエラそうに語られたくはないわね」

「そういえば…プラズマ教官も同じ様な事言ってました。現場の苦労は現場で見なきゃ本当の意味でわからないって……」

「あらーー……補佐官さん、何だか和気藹々してるわね」
少し離れたところで2人の様子を見守る暁は、彼等の様子をキョトンとした風に眺めている。
「あの気難しいユリカさんとフツーに話してる……」
「あう、何だか内容が難しくてついてけないよう」
その傍では神妙な顔つきで様子を伺う蒼龍と、難解なワードで頭がこんがらがってしまっている飛龍の姿があったとか……
（そういや、飛龍ってば鋳造技術工学（資材の運用、合成率、艤装や砲弾の建造に関する教科。艦娘と提督にとっては必須教科の1つ）が苦手だったわね……あたしがよく試験勉強手伝ってたっけ）

「ユリ～～、艤装のチェック終わったのね～～～～」
ひとしきり話し込んでいた誠太郎とユリカ。そこに、ペタペタ足音を響かせて誰かが駆け寄ってきた。
「おー伊19、悪い悪い待たせちゃったなーー」
突然現れた闖入者を、ユリカは抱擁する様に受け止める。

「わ～～～これこれ♪あんなバカ提督に触られるより、ユリが一緒にいる方がよっぽど安心できるのね～～～～っ」
「アホの話はやめなって……それより大丈夫だったか？伊１９」
　現れたのは、紺色のスクール水着を纏ったスタイルの良い女の子だった。ユリカより一回り小柄だが、豊満な胸をツナギに押し当てて嬉しそうに抱き着いている。
「伊１９の方はオールオッケーなのね。ユリがいつもチューニングしてくれるから安心して出て征けるの～～～」
　幼さが抜けきってない様な口調で、その艦娘……伊１９は無邪気に微笑んでいた。
「おーーいイク先輩～～～」
　やがて、蒼龍が思い出したように２人のところへ駆け寄っていく。
「あ、蒼龍なのね～～」
　ユリカに抱き着いていた伊１９は、蒼龍達に気付くと満面の笑顔で手を振って出迎える。
「お疲れ様です。今日は新しい提督補佐官がうちに来てくれたんです」
「あ、これ間宮アイス券。司令官のところからスッといてきたわよ」
　後から飛龍と暁もスクール水着の先輩に向けて挨拶する。というか暁、何さらっと不穏な事言っちゃってるの……

「ん…提督補佐官？」

しかし、不意に伊１９は身を強張らせる。飛龍やユリカ達の隣に、見慣れない人間の姿を見つけたからだ。

「そーいえばユリ、気になってたんだけど……そっちにいる人、誰なのね??」

それから数分後……

「提督補佐官??そんなのイクは初耳なのね～～～っ、何で教えてくれなかったの～～～???」

「あんたは秋月姉妹（第５司令室所属）と一緒にオリョクルで不在だったでしょーが……それに、あたしだって知ったのは昨夜だったんだよ」

スクール水着から霧島と同じ特務官用の制服に着替えた伊１９。ユリはツナギ姿のままだが、持っていたタブレットは置いて来たらしく今は手ぶらである。

２人の前にいるのは、第８司令部の面々である飛龍、蒼龍、暁……そして、紺の軍服を纏った年若い青年が１人。

「しっかし、山口……って、ねぇ――――――」

だが、誠太郎の眼の前に立つユリカは、ふと何か思い出した様に訝しげに顔を強張らせる。程無くして、少々言いにくそうに切り出していた。

「つかぬこと聞くんだけど……坊や、あんたの親類縁者に軍の高官やってる人、いない??」

この准尉が言わんとしてる事は朧気ながら理解できた。そしてその推察は、ほぼ間違いなく的を射ている……そう誠太郎は思っていた。

（た……多分、准尉の推測は当たってますね……隠し立てする気はないのですが）

「せいちゃんのお祖父ちゃんの事ですか!?わたし知ってます～～～♪」

途端に、誰かが勢い良く反応する。飛龍だ。

「ちょっ…こら飛龍ッ」

誠太郎は慌てて諌めるが、飛龍はそんなことお構いなし。嬉しそうに口を開いていた。

「えっ、何々??わたしも聞きたいな～～～」

「何だか気になるのね、飛龍！イクにも教えるのね!!」

しかも、何故か蒼龍と伊１９まで喰いついてくる始末。気が付けば、暁も目を爛々と輝かせて誠太郎と飛龍を見上げていた。

「海軍上級大将の山口　源児！参謀総長でせいちゃんのお祖父ちゃんなんだよッッ♪♪」

『え……えぇ～～～～～!!?!?!?!?!?』

程無くして、その場にいた者達の声にならないどよめきが響き渡った。

「嘘でしょ～～～～！あ、あんた参謀総長の孫だったの!?!?全っ然聞いてないってーのッ」

目を白黒させながら誠太郎に詰め寄る蒼龍。やや困惑気味であったが、取り敢えず理解するところは理解して貰えたらしい。

「そりゃそうですよ、誰にも言ってないんですから」

一方の誠太郎は、やや及び腰ながらもしっかりと蒼龍を見据えて返答する。
「それに祖父は祖父、自分は自分です。いくら高官の孫だからって自分自身が偉くなったわけじゃないし、此処では自分は一介の補佐官でしかないと思っていますから……」
「山口　誠太郎……ホント、確かに苗字同じだわね」
何処から出したのか、タブレットで何やら調べ出したユリカ。
「この事実、あのバカ(磯部中佐)が知ったらどんな顔するかしらね……???」
「きっと平身低頭するか、じゃなきゃゴマ擦りしてくるか……なのね」
伊19が覗き込んだタブレット……そこには、今期の士官学校卒業生の羅列が表示されている。その真ん中に大きく映っているのは、今目の前にいる誠太郎の顔だった。
「それで、アンタ達これからどーすんの？あたしはまだ工廠(こっち)での仕事残ってんだけど……」
やがて、ユリカはふと思い出した様に誠太郎に向けて質問する。
「そうですね……そろそろ磯部中佐のところに着任報告に行こうかと思います。３人とも、案内お願いできますか？」

「3人だけでアイツのところに行かせるなんて絶対にマズいの。イクもちょうど今日のお仕事終わったからついてってあげるのね」

そう言っていた伊19が誠太郎達の一行に加わり、賑やかになった5人組は基地の中央エリアへと足を運んでいた。

正面玄関のエレベーターを上に昇り、6階にある各司令官の詰所に到着。東端に位置する一室の前で一行は足を止めた。扉の前の表札は、その部屋が第8司令部指揮所であることを物語っていた。

その扉に触れようとした誠太郎だったが、

「待って、せいちゃん」

ふと、その手を飛龍がくいっと引っ張った。

「あんた……うちの提督の事、どう聞いてるの?」

何時の間にか蒼龍も、そして一歩後ろにいる暁と伊19も、真剣な顔で誠太郎を見据えている。

*

「あまり評判がよくない……とは聞いています。戦果は挙げているものの、艦娘との連携、指揮は確実性に欠け……手柄を優先した無理な進軍で周囲と協調性が望めず、他の提督との確執も少なくない……正直、警戒しています」

よく見ると、ノックをしようとした彼の手は少し白くなっている。拳を強く握り込んでいる様だ。

「どっちかっていうと、『俗物』って言った方が正しいのね……去年の補佐官さんも、パワハラぶりが酷くて軍を辞めちゃったくらいなの」

伊１９は特務官用制服の胸元をギュッと握りながら呟く。強く握っているせいか、彼女のシャツには皺が寄っていた。

「……一部の方からも注意する様にと言われています。とにもかくにも、まずは会ってみない事には何とも言えないんですが」

それでも、誠太郎も飛龍達も緊張は拭えない。その得体のしれない不安を抑え込み、誠太郎は徐に扉を叩いていた。

「……入れ」

奥からその声が聞こえるとともに、誠太郎は勢いよく扉を開いていた。

「――――失礼します。本日着任予定の山口　誠太郎中尉、提督補佐官として着任の挨拶に参りました！」

＊

その男は、正面に見えるデスクの椅子にまるで陣取る様に腰掛けていた。

一見するとごく普通の男性に見えるが、中佐の階級章を付けた襟元も、胸元の勲章も、何よりどんより濁った双眸が男の異質さを如実に物語っている――――そう感じさせていた。

「ほう、貴様が山口　誠太郎中尉か」

まるで値踏みする様に男は誠太郎を眺めると……すぐにフン、と鼻を鳴らす。

「何々……江田島では大層な成績だった様だな、しかもお祖父様は今を時めく参謀総長。まったく、鳴り物入りとはよく言ったものだよ」

その男……磯部中佐は、報告書にさらりと目を通すと再び正面の誠太郎を睨む。

「それにしても、おやおや。何時の間にやらうちの艦娘共と仲良くなっているそうじゃないか……早くも取り入る準備に余念がない様だな」
彼の傍に飛龍、蒼龍、暁、伊１９がいるのが余程滑稽に見えたらしい。口元を二ィ…と歪めてくぐもった笑い声を見せる。
「っ、誤解です。私達は着任した中尉のご案内を……」
「誰が喋っていいと言った？蒼龍、ん？」
慌てた蒼龍が抗議する。しかし、磯部中佐はジロリと一睨みして一蹴していた。
「申し訳ございません。彼女達に案内を頼んだのは自分の勝手な判断であります」
しかし、そんな磯部中佐を遮る様に誠太郎は呟いていた。蒼龍をやんわりと制止する事も忘れずに。
一見すると単なる言葉の応酬にしか見えない……が、その場に居る飛龍や暁、伊１９には、この部屋全体の温度が一瞬で１０℃近くも下がった様な不気味な雰囲気を感じたように思えた。
それほどまでに部屋の空気がギスギスし始めていた……

「ふん、まだ着任の挨拶もしていない貴様が……全く、祖父が偉いと多少の勝手は許してくれる様だなぁ。良い御身分だよ、我々とは質が違う――――――」

一方、対峙する磯部中佐は歪んだ表情をより不気味に歪めて、そして机に置いていたマグカップを徐に手に取った。

瞬間――――――

ゴッ!!!

突然、陶器の割れる音が響く。磯部中佐がその器を、誠太郎の頭に思いきりぶつけたのだ。

「調子に乗ってるんじゃないぞ小僧！士官学校ではどうだったか知らないが、ここでは貴様など一介の下士官でしかない！それを俺の許可なく勝手に艦娘を運用する!?何様のつもりだ、ガキが!!」

陶器が割れ、熱い珈琲と血が部屋に飛び散る。頭に直撃したそれが皮膚を切って出血させていた。

「せいちゃん!?」
思わず飛龍が駆け寄り、直立不動で佇む誠太郎を庇うように前に立った。
「んん？何だ飛龍、俺のやる事に文句あるのか!?」
目の前に立つ飛龍を見て、磯部中佐はまたも歯軋りするほどに顎を噛み合わせる。
「ぁ、あんた何してるのね!?この人、参謀総長の……」
「知った事か！俺はこういう小僧は大嫌いなんだよ、何の実績も無い癖に偉そうにする――――」
件の中佐は抗議した伊１９の制止も聞く耳持たず、今度はつかつかと大股で誠太郎の傍に近寄り、むんずと襟首を掴み上げた。
「……重ね重ね申し訳ありません。私が至らぬばかりに彼女達に迷惑を掛け、中佐の意向に背く形となってしまいました。以後、このような事が無いよう自身も善処する所存です」
一方…誠太郎は額から出血し、その血が顔を伝って床にまで垂れていた。しかし何事も無かった様に直立不動のまま磯部をジッと見据えていた。
「……いいか、此処の指揮官はこの俺だぞ、艦娘だろうとお偉いさんの孫だろうと俺の命令は絶対！そいつを肝に銘じておけ!!」

まるで相手をそのまま絞め殺しそうな剣幕でまくし立てると、磯部中佐はそのまま突き放す様に誠太郎を手放す。

「それと……俺の許可なく不穏な行為をするなよ。おかしな真似をしたのなら、スパイ容疑で告発してやるからそのつもりでいることだな」

そして……吐き捨てるようにそう言うと、磯部中佐は肩を怒らせて執務室から出て行った。

＊

「……おい俺だ。一先ず接触してみたが、奴は気付いていない様だぞ」

人気のない所まで来ると、磯部中佐は不意に電話を取り出した。

『油断するな、昼行燈を装っている可能性もある』

「そいつは安心しろ。何か不穏な事をしたなら……逆にスパイ容疑で突き出してくれ

る」

　不機嫌なようだったが、同時に何処か勝ち誇った様な雰囲気すら纏っている。今の磯部中佐は見る人が見れば不穏極まりない形相で会話を愉しんでいた。

「しかし面白みのない小僧だ。頭かち割っても悲鳴を上げるどころか逆に陳謝するとは……嫌味のつもりか？」

『さぁな……だが油断するな。今は忘れているかもしれんが、いつ思い出さんとも限らん。真相が露見する事だけは何としても避けるんだぞ』

　電話の向こうでは何処か上擦った様な声が聞こえる。しかし、磯部中佐はそれを気に留める事も無く不気味な笑みすら浮かべていた。

「安心しろ、俺が逐一監視する。悟られるってんなら、その前に潰せばいいのよ……

――――――――奴の親父の様にな」

＊

「せいちゃん……せいちゃん、大丈夫!?」

磯部中佐が立ち去った第８司令部では、頭から血を流す誠太郎を飛龍が介抱しようとしていた。

「……いや、平気だよ、ひなちゃん。こんなのお祖父様の折檻に比べたら痒くも無いさ」

そっとハンカチを取り出して流れる血を拭う誠太郎。

派手な音がした割に、傷は浅かったらしい。２度、３度と軽く叩くように拭っていると、出血はすぐに止まっていた。

「プラズマ教官の研修訓練でも怪我や捻挫は日常茶飯事だったからね。多少の痛みには慣れっこだよ」

そう言うと、今度はハンカチを取り出して床に落ちた破片を丁寧に拾っていく。こんなものを放置しておいたら誰かが踏んづけて大変だ。

「うぁー、キミって結構頑丈なのねー」

様子を伺っていた伊１９は、やや感嘆した様に呟いた。

「すいません、掃除用具一式持ってきて貰えませんか？取り敢えず、皆でこれ片づけてしまいましょう」